

十全同窓会会報 173

2019 / 9



目次 | CONTENTS

令和元年度十全同窓会総会開催…02	受賞……………16	同窓生の消息……………37
物故会員……………03	学会報告等……………18	金沢から世界へ発信……………38
就任挨拶……………04	金沢大学関連病院長会議…22	十全歴史ひろば……………40
総会記事……………07	御遺骨返還式・合同慰霊祭…23	十全昔話……………42
教授就任講演……………10	十全学術行脚……………24	学生コーナー……………44
内科再編……………14	病院紹介……………26	キャンパスビジット……………45
ヘリポートの運用開始……15	教室・支部だより／クラス会…28	金澤醫學校解剖遺骸之碑…46

令和元年度 十全同窓会総会開催

日時／令和元年7月6日(土)

場所／医学部記念館

御代替わり後初の開催

令和元年度の十全同窓会総会が、去る7月6日(土)午前9時より、医学部記念館において、中村信一会長の開会の辞で開始された。昨年の大雨とは打って変わり好天に恵まれ、多くの方に出席をいただいた。平成30年7月1日から令和元年6月30日までに逝去された物故会員(54名)に黙祷を捧げた後、中村信一会長が議長を務めて議事に入った。

まず、土屋弘行理事長より平成30年度の会務報告が行われた。平成30年3月の卒業生は121名であったこと、18支部の総会に会長・理事長・理事が出席したこと、現在会員総数(14981人)などが報告された。次に、和田隆志医学系長・医学類長から、医学類の現状、大井章史教授、三邊義雄教授、谷内江昭宏教授の退職、分子遺伝学の倉知慎教授、循環器内科学高村雅之教授、神経行動科学

の菊知充教授の新任が報告された。堀修大学院医薬保健学総合研究科長より、大学院管理・運営体制、大学院教育、教育プログラムの現状の報告、市村宏大学院先進予防医学研究科長より、大学院先進予防医学研究科大学院修了要件、教育プログラムなどが説明された。報告に続き第17回高安賞の贈呈が行われた。中出祐介氏(血液情報統御学)に最優秀論文賞、篠崎康之氏(がん幹細胞学)、齋藤夕貴氏(臓器機能制御学)には優秀論文賞が授与された。

本年は、参席された15支部の代表が紹介された後、議事審議に移り、中村裕之理事から平成30年度事業および会計決算報告、森紀喜監事より監査報告がされ承認された。また土屋理事長から令和元年度事業計画、および中村理事より予算案の説明がなされ、承認された。役員改選では、監事の高櫻英輔先生が再任され、新たに高村雅之先生、菊知充先生、倉知慎先生が理事に就任した。

議案審議について、学生課外活動支援として西医体および医学展実行委員会に支援金が贈呈された。

就任記念講演と懇親会

総会後には教授就任記念講演が、細胞分子機能学安藤仁教授から「概日リズムに着目した疾病の予防・治療法の開発」、統合神経整理学三枝理博教授から「体内時計・睡眠覚醒システムの統合的理解と疾患への応用に向けて」、組織細胞学西山正章教授から「自閉症の発症メカニズムの解明と創薬開発への応用～自閉症は大人になっても治せるか?～」、分子遺伝学倉知慎教授から「T細胞分化を制御するパイオニア転写因子とクロマチン・ランドスケープ」と題して行われ、参加者一同、若い先生方のパワフルで興味深い講演に魅了された。講演終了後、2階ラウンジにて懇親会が行われた。中村会長のご挨拶、岡山支部長の浅海浩二先生のご発声による乾杯の後、各支部代表からご挨拶・近況報告をいただき、和やかな進行のうち、副会長の小森貴先生による中締め挨拶後盛會裏に散会となった。

(土屋 弘行：記)



物 故 会 員

(平成30年7月1日～令和元年6月30日の連絡)

片岡茂太郎	昭和17年専卒業
北村豊三郎	昭和17年専卒業
山本 英臣	昭和19年専卒業
松原 稔	昭和20年専卒業
池田 仁紀	昭和22年卒業
中山与三次	昭和22年卒業
谷本 恒幸	昭和23年卒業
細田 行隆	昭和23年卒業
山田 禎一	昭和23年卒業
砂川 省介	昭和23年専卒業
津田 利雄	昭和23年専卒業
小山 隆三	昭和24年卒業
有馬 英之	昭和24年専卒業
上林 昌生	昭和25年卒業
清水 郁郎	昭和25年専卒業
山崎 時雄	昭和25年専卒業

出口 國夫	昭和26年卒業
鈴木 昭夫	昭和26年専卒業
前田 昭治	昭和27年卒業
松井 一信	昭和28年卒業
宮下 友吉	昭和28年卒業
倉西 久雄	昭和29年卒業
柿下 正雄	昭和30年卒業
勝木 道夫	昭和30年卒業
宮沢 英夫	昭和30年卒業
多留 淳文	昭和31年卒業
金田 又衛	昭和33年卒業
木南 義男	昭和35年卒業
高松 弘明	昭和35年卒業
鈴木 堂宏	昭和36年卒業
長田 俊彦	昭和36年卒業
長基 顕	昭和36年卒業
刀禰 恒夫	昭和37年卒業
安村 昭芳	昭和37年卒業
竹島 俊雄	昭和38年卒業

蓮村 靖	昭和38年卒業
高良 清一	昭和40年卒業
藤田三樹雄	昭和40年卒業
浜田 重雄	昭和41年卒業
高沢 嘉邦	昭和42年卒業
高橋 卓朗	昭和42年卒業
菅原 正弘	昭和43年卒業
原 報	昭和44年卒業
北川 和久	昭和46年卒業
鈴木志津子	昭和47年卒業
太田 真人	昭和49年卒業
中西 幸二	昭和58年卒業
磯松 幸尚	昭和61年卒業
村戸 政夫	昭和61年卒業
平林はやと	平成2年卒業
本多 明義	大学院修了
太田 舜	II会員
緒方 宏	II会員
林 武雄	II会員

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
会員のご不幸は当会にご一報をお願いいたします。



就任挨拶



和田 泰三 博士

(平成4年卒業)

子どもにやさしい 創造性豊かな人材の育成

令和元年8月1日付をもちまして、金沢大学医薬保健研究域医学系小児科学を担当させていただくことになりました。私

金沢大学医薬保健研究域医学系小児科学教授に就任

は、1992年に本学を卒業した後、谷口昂教授が主宰されていた小児科学教室に入局し、小児科学、臨床免疫学を学ばせていただきました。大学院修了後、米国立衛生研究所ヒトゲノム研究所に留学する機会を小泉晶一教授に与えていただき、F Candotti先生のもとで原発性免疫不全症に関する研究を約3年間行いました。この経験はさまざまな取り組みの根底となる、私にとって重要な礎となりました。帰国後は、小児の免疫・アレルギー疾患の臨床と研究を続け、恩師谷内江昭宏教授より「症例から学び普遍化する」大切さを教えていただきました。

教室は、泉熱で有名な泉仙助先生が1924年に小児科の初代教授として着任されて以来、もうすぐ百年の節目を迎えます。この間、小児の疾病構造は大きく変化し、少子化が進みましたが、小児科

学を通して子どもたちの笑顔と幸せのために全力を尽くすという考え方に変わりはありません。小児科医には、出生前から成人(移行期)まで、全身のあらゆる病態に対応できる力が求められます。学生や若手医師とともに学び、学内および学外のさまざまな部署と連携を行いながら、子どもたちを支えていくことが使命と考えております。

小児医療を通じた社会への貢献、小児疾患の研究を通じた科学への貢献、人材育成を通じた次世代への貢献を行い、子どもたちの健康の向上、金沢大学の発展のために邁進する所存でございます。十全同窓会の先生方には一層のご支援とご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



渡会 浩志 博士

(特別会員)

リサーチマインドを持つ 臨床医や若手研究者の育成に邁進

令和元年6月1日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系・再生分子医学分野の教授を拝命いたしました。

私は平成3年に東京大学農学部農芸化

金沢大学医薬保健研究域医学系・再生分子医学分野の教授に就任

学科を卒業後、同大学大学院農学系研究科農芸化学専攻で鈴木昭憲教授(元秋田県立大学学長)のもと修士課程を修了しました(天然物有機化学)。キリンビール医薬探索研究所に就職し、抗体医薬など高分子創薬の基礎研究に従事しました。キリン社は基礎研究にも非常に理解のある会社で、国内外のアカデミアの研究者との連携を通して基礎免疫学への扉を開いてくれました。その後、縁あって平成15年より当時新しく発足した理化学研究所・免疫アレルギー科学総合研究センターにて谷口克センター長のもとiNKT細胞を中心とした免疫学の基礎研究に従事する機会をいただきました。平成25年からは東京大学医科学研究所・幹細胞治療研究センター(中内啓光センター長)においてiPS細胞などの幹細胞にも視野を広げ、免疫学の異分野融合研究を推進してきました。

金沢大学においては「基礎研究の成果を臨床現場へ」をモットーに、再生・細胞医療等、従来の医療技術では解決できない疾患治療を可能とする研究開発、従来にない効果が期待される創薬技術開発、など幅広く目指していきたいと考えています。

私に取りまして金沢はこれまで縁の薄い土地でしたが、着任し数ヶ月のうちに歴史文化都市が醸し出す情緒に魅了され始めています。金沢を第二の故郷として、本学の発展に少しでも貢献できるよう、研究と教育に全身全霊をもって邁進し、「金沢クオリティ」と呼ばれるような臨床医や若手研究者の育成に取り組んでいく所存でございます。十全同窓会諸先生方におかれましては一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



浅井 徹 博士

(昭和61年卒業)

心臓血管外科の最高水準を極めるため尽力

平成31年2月1日付で順天堂大学心臓血管外科講座の教授を拝命いたしました。

私は昭和61年に金沢大学医学部を卒業し、岩喬教授が主宰する第一外科に入局し心臓外科医を志しました。金沢大学附属病院と石川県立中央病院で外科研修した後、ECFMGの取得後、岩教授が主催された日本胸部外科学会でお招きし

順天堂大学心臓血管外科学講座教授に就任

たFrank C. Spencer教授の指導のもと、米国NYU Medical Centerに留学しました。5年余の期間に、外科レジデント、心臓血管外科フェロー（チーフ）として主に心臓血管外科の臨床修練を積みました。研究では「内胸動脈採取法」「心筋保護法」「basic FGFの新生内膜増殖」に関する研究を行いました。最後の2年間はチーフとしてチームを率いて予定を組み冠動脈バイパス術、心臓弁膜症手術など500例以上の心臓手術を指導医監督下に自ら執刀する立場で診療と教育に従事しました。帰国後平成6年8月に金沢循環器病院に勤務し、平成8年からは心拍動下バイパス手術を、また僧帽弁の積極的な形成手術を全国にさがけ導入しました。

平成14年1月から滋賀医科大学外科学講座(心臓血管・呼吸器)の教授として着任しました。診療では、重症、高齢、緊急に関わらず手術が必要な患者はすべて受け入れるno refusal policyを徹底し、地域医療に貢献しました。また心臓血管外科臨床研究や病態にかかわる研究、特に「動脈グラフトによる心拍動下冠動

脈バイパス術の研究」、「僧帽弁閉鎖不全症に対するジオメトリ重視の形成術開発」、「致死的な心筋梗塞後心室中隔破裂の安全な新手術法の開発」、「弓部大動脈瘤弓部全置換術の低侵襲化」などに取り組みました。さらに平成21年から10年間にわたりベトナムへ心臓血管外科指導交流を目的に若手スタッフとともに訪問して基幹施設の心臓血管外科治療レベルの向上に努めました。平成30年には滋賀県救急医療功労者として滋賀県知事から表彰を受け、現在も滋賀県参与として意見具申しております。

平成30年秋には滋賀医科大学学長補佐に就任し診療科長を後進に譲りましたが、順天堂大学天野篤院長の熱心なお誘いを受け、首都東京で心臓血管外科の最高水準を極めるため職をお受けする決断をいたしました。金沢時代、滋賀医科大学時代にも増し、全国から難易度の高い外科治療を必要とする患者さまをお断りなくお受けしています。金沢大学十全同窓会の皆さまの今後のご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



山岸 昌一 博士

(平成元年卒業)

これまで以上に気を引き締めて、昭和大学のために尽力したい

平成31年4月1日付で昭和大学医学部内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科学

昭和大学医学部内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科学部門教授に就任

部門の教授を拝命いたしました。私は、平成元年に本学医学部を卒業し、直ちに大学院医学研究科に進学、服部信教授の主宰される第一内科に入局いたしました。その後、小林健一教授のご指導のもと、糖尿病患者さんの診療を中心に、合併症に関する研究に従事してまいりました。小林教授からは、渡米後、平成12年に久留米大学に赴任する際、神代正道教授をご紹介いただき、異動に際しては大変にお世話になりました。また、久留米大学では、神代理事長、薬師寺道明学長をはじめ、多くの先生方から、多大なご支援をいただくこととなり、平成20年から、約11年間、医学部糖尿病性血管合併症病態・治療学の教授を務めておりました。長く金沢から遠く離れた九州の地で教育、臨床、研究に取り組んできま

したが、この度、金子周一教授のご推薦とひとかたならぬご尽力により、昭和大学医学部で内科学講座の教授に就任することとなりました。これまで、実に多くの同窓の先生方に助けていただきました。幸い、8億円以上にのぼる公的研究費を獲得でき、600報におよぶ英文論文を発表してこれましたこと、支えてくださった先生方に対する感謝の気持ちで一杯でございます。昭和大学では、糖尿病・代謝・内分泌内科学部門の教授としてだけでなく、本院を含む附属4病院の診療を統括する立場にもあります。お世話になりました先生方の顔に泥を塗ることがないよう今まで以上に気を引き締めて、昭和大学のために働いていこうと思っております。同窓の先生方には、変わらぬご指導とご支援をいただければと存じます。

就任挨拶



岡田 尚巳 博士

(平成3年卒業)

国際共同利用・
共同研究拠点の構築

このたび、令和元年7月1日付で東京大学医科学研究所遺伝子・細胞治療センター分子遺伝医学分野教授を拝命いたしました。私は平成3年に金沢大学医学部を卒業後、山下純宏名誉教授が主宰された金沢大学医学部脳神経外科に入局し、平成7年に金沢大学大学院博士課程を修

東京大学医科学研究所遺伝子・細胞治療センター教授に就任

了しました。富山市民病院に勤務後、金沢大学小児科の谷内江特任教授および故谷口名誉教授のご高配により、平成8年から2年間米国NIHのR.M.Blaese博士の研究室にて遺伝子治療研究に携わる貴重な機会をいただきました。

帰国後は公立能登総合病院にて臨床の研鑽に専念しておりましたが、機会があり、平成12年から自治医科大学小澤敬也特任教授のご指導にてAAVベクターを応用した遺伝子治療基盤技術の開発に携わり、助手、講師として研鑽させていただきました。平成19年、国立精神・神経医療研究センター神経研究所に室長として赴任し、神経筋疾患に対する遺伝子幹細胞療法の基盤技術開発を推進しました。この間、高品質AAVベクター製造法や免疫寛容誘導療法を開発し、実用化に向け大きく前進することができました。

平成26年からは、日本医科大学生化学・分子生物学(分子遺伝学)に大学院教授として赴任し、遺伝子・細胞治療基盤技術の開発に加え、医学部教育改革、国

際認証や遺伝診療について様々な取り組みを体験させていただきました。そして今回、東京大学医科学研究所にて遺伝子・細胞治療センターを担当する機会をいただくこととなりました。東京大学は指定国立大学法人として知の協創の世界拠点を形成することを目標に掲げています。遺伝子・細胞治療センターとしては、遺伝子・細胞治療の開発における産官学連携エコシステムの構築を通して、国際社会全体の発展に向けた取り組みを進めたいと考えております。

今後も引き続き、皆さまのご指導により、難治性疾患の病因解明や遺伝子細胞治療の開発と普及に貢献してまいりたいと考えております。また大学院医学系研究科も担当しており、本学ご卒業で遺伝子細胞治療に関心のある若い先生方には、ぜひご連絡いただきたく存じます。末筆となりましたが、十全同窓会会員の皆さまのご健勝を祈念いたしますとともに、引き続き皆さまのご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。



藤永 康成 博士

(平成9年度大学院修了)

さらなる放射線診療の進歩を
目指して

平成31年4月18日付で、信州大学医学部画像医学教室(放射線科)の教授を拝

信州大学医学部画像医学教室教授に就任

命いたしました。当科は、1951年に放射線科として設立された歴史ある教室で、私が6代目の教授になります。私は富山県出身で、平成5年に神戸大学医学部を卒業し、高島力教授が主宰されていた金沢大学放射線医学講座(当時)に入局いたしました。その後、平成10年に金沢大学大学院を修了し、博士号を授与されました。北陸では厚生連高岡病院、市立敦賀病院、福井県済生会病院などでお世話になりましたが、角谷眞澄前教授が金沢大学から信州大学に栄転された直後の平成13年4月に信州大学に赴任いたしました。

信州大学では、角谷前教授の指導のもと主に腹部領域のMRI診断を中心に研究を行って参りました。動きのある臓器という悪条件を克服するだけでなく、技術の進歩に伴いMRIの高画質化、さら

には機能診断への応用が進み、肝胆膵領域では質的診断や治療方針決定に重要な役割を担う検査となっています。

一方で、画像検査は増加の一途を辿っており、放射線治療や画像下治療(IVR)についても高精度化が進むとともに需要が高まっています。放射線科医の数はこれに追いついておらず、全国的に不足しています。信州も例外ではありません。学生や研修医に放射線科の魅力を伝えるとともに、質の高い放射線科医を育成することは急務であり、地域の医療にとって大変重要なことであると考えています。

教室一丸となって、そして金沢大学ともタッグを組んで放射線医学を極め、質の高い放射線診療を広めたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



藤本 学 博士
(特別会員)

よりよい診療・教育・研究が
できるよう頑張りたい

平成31年2月1日付で大阪大学医学系
研究科情報統合医学講座皮膚科学教室
教授を拝命いたしましたので、この場を

大阪大学医学系研究科情報統合医学講座皮膚科学教室教授に就任

お借りしてご挨拶申し上げます。金沢大学には2005年から2013年まで皮膚科学講座准教授として在籍させていただき、十全同窓会の皆さまには大変お世話になりました。ありがとうございました。

私は1992年(平成4年)に東京大学医学部を卒業後、東京大学皮膚科学教室に入局して、東大病院や関連病院で臨床研修を積みました。当時の東京大学皮膚科の外来医長(講師)が竹原和彦先生であり、竹原先生の研究グループに所属させていただいておりました。その後、竹原先生は1994年に金沢大学教授としてご栄転されましたが、2004年にそれまで助教授をされていた佐藤伸一先生(現・東京大学教授)が長崎大学教授として赴任された後に、金沢大学に呼んでいただきました。金沢大学で8年半お世話になりました。それから2013年11月に筑波大学医学医療

系皮膚科教授を拝命しましたが、このたび大阪大学に異動することとなりました。

臨床および研究では、これまで強皮症・皮膚筋炎などの膠原病や自己免疫を主要なテーマとしてB細胞と抗体を軸に臨床や研究に従事してまいりました。金沢大学在籍中に発表させていただいた制御性B細胞や皮膚筋炎特異自己抗体の仕事は今でもライフワークとなっています。今後も、金沢大学で学んだことを十分に生かして大阪の地でも、よりよい診療・教育・研究ができるように頑張っていきたいと思っています。つくばでもそうでしたが、大阪でも十全同窓会の先生方がたくさん活躍されており、大変心強く思っています。

最後に、金沢大学医学部と十全同窓会
のますますのご発展を祈念申し上げます。
今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしく
お願い申し上げます。

総 会 記 事

平成30年度決算報告ならびに令和元年度予算について

平成30年度決算

表1に一般会計の決算書を示します。会費収入は減少傾向であったが、その減少幅は最小限なものとなりました。本年度より会報編集委員会による広告収入(自助努力)がありました。支出では、同窓会ウェブサイトリニューアル作業にかかる費用は事業費より充てました。各支部総会への参加旅費が増加しましたが、本学総会への参加は西日本豪雨の影響で減少しました。補助費は記念館整備が必要とされなかった分、減額となりました。全体としては会費収入は激減するも、広告収入によりなんとか支出とのバランスが取れています。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は資産運用で得た利息のみです。また高柳奨学金は、奨学生1名の採用がありました(表2～4参照)。

令和元年度予算

会費収入は努力目標を計上しました。会費納入率は50%に満たない状態が持続しており、納入率向上のさらなる努力が必要とされています。特に、新入会員の納入率低下は、長期低落傾向を示しています(図)。学類在籍中から多方面で働

きかけることにより、帰属意識を高め、新入会員の納入率を増加させることが、最大の課題です。支出は学生課外活動や図書館などの活動補助は見直しを図りました。十全医学会学術集会の活動支援を計上しました。高柳奨学金は、奨学生1名の採用予定です(表5～8参照)。

(会計担当 中村 裕之：記)

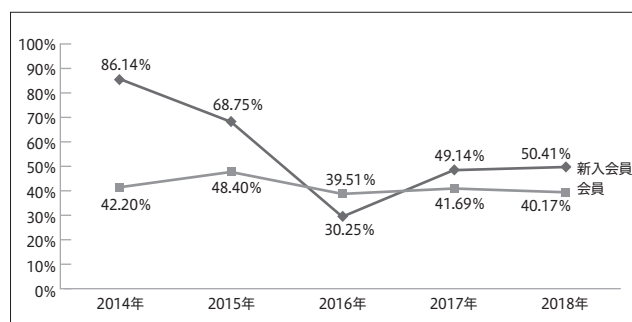


図 過去5年間の会費納入率(新入会員・会員)の推移



会計監査報告書

総 会 記 事

表1 平成30年度決算書

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入				支 出			
科 目	予 算(円)	決 算(円)	摘 要	科 目	予 算(円)	決 算(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	2,311,503	2,311,503		事業費	6,363,088	6,057,965	会報第165, 166, 167号・総会チラシ印刷製本代 2,834,886 封入作業代 148,586 会報・アカンサス封入、発送代 理事会関係発送 1,561,845 発送用封筒代・会費払い込み用紙 242,852 アカンサス印刷代 44,100 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 新入会員管理サイトログイン情報通知 20,000 新入会員卒業祝(印鑑付ペン) @2,268×122本 276,696 同窓会ウェブサイトリニューアル作業一式 729,000
会費収入	11,965,000	11,141,000	平成30年度会費 4,000円×1,481人 過年度分 461人 平成31年度以降 7人 準会員会費 6,000円×100人 5,000円×1人	旅費	1,500,000	877,120	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 877,120
				会議費	480,000	460,754	総会、理事会、会報編集委員会、反省会 460,754
				慶弔費	100,000	2,960	弔電・生花 2,960
雑収入	0	617,600	会報掲載広告収入 81,000円×1社 81,000 50,000円×4社 200,000 48,600円×1社 48,600 45,000円×2社 90,000 27,000円×4社 108,000 25,000円×3社 75,000 15,000円×1社 15,000	補助費	720,000	620,000	記念館展示室整備 0 図書館医学類分館図書補填 200,000 西医体補助 100,000 学生課外活動補助(ACLS) 50,000 医学展補助 50,000 立山診療班 100,000 白山診療班 100,000 金沢大学大学院医薬保健総合研究科(修士課程及び医学博士課程)・先進予防医学研究科 進学説明会補助 20,000
				事務費	3,600,000	3,465,146	会費払込料金、パソコン・プリンターメンテナンス等一式・通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 965,146 人件費 2,500,000
				支部への補助費	600,000	470,000	15件 470,000
				予備費		89,300	封入作業・印刷代等 89,300
				繰越金	913,415	2,026,858	
計	14,276,503	14,070,103		計	14,276,503	14,070,103	

表2 平成30年度 十全同窓会基金会計

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	47,130,268				
利 息	103,318	利付国債(第118回・第336回)			
計	47,233,586		計	0	残高 47,233,586

表3 平成30年度 十全同窓会名簿作成会計

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
繰越金	433,051				
計	433,051		計	0	残高 433,051

表4 平成30年度 高柳奨学会計

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	4,315,850		奨 学 金	75,000	H29年度 奨学生1名(25,000円/1ヶ月) 平成30年1月～平成30年3月分
利 息	509	定期預金利息		225,000	H30年度 奨学生1名(25,000円/1ヶ月) 平成30年4月～平成30年12月分
			事務費	432	残高証明発行手数料
計	4,316,359		計	300,432	残高 4,015,927

表5 2019年度 予算書

自 2019年 1月 1日
至 2019年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	2,026,858		事業費	5,918,140	会報・総会パン印刷製本代 3,000,000 会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,700,000 発送用封筒代・会費払い込み用紙 180,000 会報発送封入作業 年3回 180,000 十全医学会学術交流会支援 200,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 新入会員卒業祝(印鑑付ペン) @ 2,268×105本 238,140 ホームページ会員情報サイト管理 120,000 アカンサス印刷代 50,000 新入会員管理サイトログイン情報通知 20,000 会報製本代(会報第153号～第169号) 30,000
会費収入	11,500,000	平成30年度会費 4,000円×1500人 6,000,000 過年度分 4,575,000 2020年度以降 300,000 準会員会費 6,000円×100人 600,000 5,000円×5人 25,000	旅 費	1,300,000	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費
雑収入	600,000	会報掲載広告収入	会議費	480,000	総会、理事会、会報編集委員会
			慶弔費	100,000	弔電・生花
			補助費	170,000	学生課外活動補助 医学展 50,000 西医体 100,000 金沢大学大学院医薬保健総合研究科(修士課程及び医学博士課程)・ 先進予防医学研究科 進学説明会補助 20,000
			事務費	3,600,000	会費払込料金、プリンター修理等一式・感光体・トナー、 通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 800,000 人件費 2,800,000
			支部への補助費	600,000	
			繰越金	1,958,718	600,000
計	14,126,858		計	14,126,858	

表6 2019年度 十全同窓会基金会計 予算

自 2019年 1月 1日
至 2019年12月31日

収 入			支 出		
科 目	予 算(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	47,130,268				
利 息	103,318	利付国債			
計	47,233,586		計	0	残高 47,233,586

表7 2019年度 十全同窓会名簿作成会計 予算

自 2019年 1月 1日
至 2019年12月31日

収 入			支 出		
科 目	予 算(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
繰越金	423,261		事務費	10,000	払込手数料、郵便料
計	423,261		計	10,000	残高 413,261

表8 2019年度 高柳奨学金会計 予算

自 2019年 1月 1日
至 2019年12月31日

収 入			支 出		
科 目	予 算(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	4,015,927		奨学金	75,000	H30年度奨学生 1名 /25,000×3ヵ月(1月-3月)
奨学金返済	300,000			225,000	H31年度奨学生 1名 /25,000×9ヵ月(4月-12月)
利 息	509	定期預金利息	事務費	432	残高証明発行手数料
計	4,315,214		計	300,432	残高 4,014,782

教授就任講演

概日リズムに着目した 疾病の予防・治療法の開発

細胞分子機能学 安藤 仁

時間治療の必要性

生体のさまざまな生理機能には24時間を1周期とするリズム(概日リズム)が存在し、恒常性維持に寄与している。概日リズムは、薬の感受性や薬物動態(吸収、分布、代謝、排泄)においても認められるため、薬の投与時刻はしばしばその効果や安全性に影響をおよぼす。この投与時刻の影響を明らかにする研究分野が時間薬理学であり、時間薬理学的特徴を考慮した薬物療法が時間治療である。例えば、最近我々は、直接経口抗凝固薬の有効性および安全性が投与時刻により異なる可能性を動物モデルで見出した(J Pharmacol Sci 134:234-8, 2017; in preparation)。臨床での確認が必要ではあるが、これは時間治療の重要性を物語る一例である。しかしながら近年は、薬の有効性のみを重視し、投与時刻を考慮しない長時間作用型の薬剤の開発が積極的に推進されている。このことは安全性の観点からはやや疑問であり、時間薬理学のさらなる普及、啓発が必要と考える。

体内時計の障害と生活習慣病

現代は24時間社会であり、シフトワーカーなど概日リズムが障害されている人々は少なくない。近年、シフトワークは、高血圧、糖尿病、肥満、一部のがんなどの生活習慣病のリスクとなることが疫学的に明らかになった。我々は、その機序として、概日リズムを発振する細胞内体内時計の障害が関与することを明らかにしてきた(金沢大学十全医学会雑誌 127:108-9, 2018)。まず、肥満2型糖尿病モデルマウスや2型糖尿病患者では、それぞれ脂肪組織や末梢白血球の時計遺伝子発現リズムが障害されている

ことを見出した。次に、それらの体内時計障害と肥満や2型糖尿病との因果関係を推測するために、代謝異常を認めない若齢マウスや糖尿病のない健常人を対象に体内時計機能を解析したところ、体内時計障害は肥満や2型糖尿病の発症に先行して認められることが判明した。さらに、照明条件を変更することにより慢性的に体内時計を障害したマウスでは、実際に体重増加や耐糖能悪化が認められること、時計遺伝子は脂肪細胞の分化に必要であること、肝細胞の体内時計は空腹時血糖の日内リズムを制御していることも明らかにした。したがって、体内時計の障害、特に脂肪組織や肝における体内時計障害は、肥満や2型糖尿病の一因であると考えられる。

体内時計を標的とした 生活習慣病の予防・治療法の開発

現代は24時間社会であり、健康に悪いとわかっていても体内時計障害が不可避である人は少なくない。ヒトの体内時計の中枢(中枢時計)は視床下部の視交

叉上核に存在しており、光刺激により時刻がセットされるとともに、自律神経や液性因子を介して全身の細胞内時計(末梢時計)にその時刻情報を発信している。中枢時計は睡眠覚醒リズムにも影響することから、シフトワークや深夜勤務に従事する人の場合には治療標的にはしにくい。一方、脂肪組織や肝のような末梢時計の体内時計であれば、睡眠覚醒リズムとは関係なく制御できる可能性がある。そこで我々は末梢時計を標的とした薬物療法の探索を開始し、マウスにおいて効果のある複数の薬物をすでに見出した。現在、これらの薬物療法を臨床応用することにより、体内時計を標的とした生活習慣病の予防・治療法の開発を目指している(図)。

最後に

本研究は、多くの十全同窓会の先生方のご指導とご協力のもと、実施してまいりました。深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

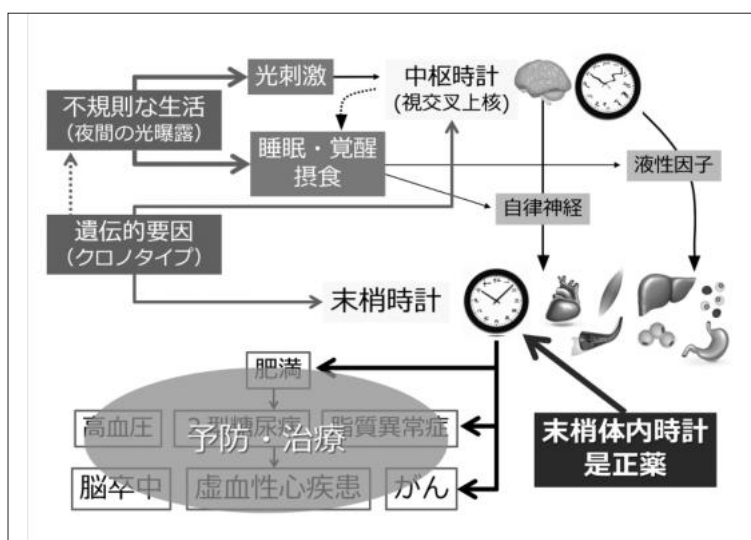


図 末梢体内時計を標的とした生活習慣病の予防・治療法

体内時計・睡眠覚醒システムの 統合的理解と疾患への応用に向けて

統合神経生理学 三枝 理博

体内時計・睡眠覚醒システムと健康

睡眠に問題を抱える日本人は5人に1人と言われており、睡眠の質の改善は心身の健康を増進する上で大変重要な課題である。睡眠のタイミングや量・質を決める主要な制御機構の一つに体内時計があるが、時差やシフトワーク、生活習慣の乱れにより、体内時計の変調は誰にでも起こりうる問題である。体内時計変調は睡眠障害のみならず、気分障害、肥満、心筋梗塞、がん等、様々な疾患・健康障害のリスクを増大する。

個々の細胞内で機能する体内時計を動かす遺伝子(時計遺伝子)についてはすでにほぼ明らかにされている。しかしながら、膨大かつ多様な細胞、組織、器官から成るヒトなど複雑なシステムでは、細胞内分子メカニズムだけで個体レベルの体内時計・睡眠覚醒システムの全貌を理解することはできない。特に、多くの細胞が集まって視床下部の視交叉上核に形成される堅牢な中枢体内時計の神経ネットワークメカニズム、中枢体内時計から発信された時刻情報が睡眠など様々な生理機能に表出されるメカニズム、体内時計変調によるさまざまな疾患の病態生理などは、未だ明らかになっていない。

ニューロンタイプ特異的遺伝子操作による 睡眠・体内時計神経回路の解析

我々は、マウスでのニューロンタイプ特異的な遺伝子操作や神経活動操作などの手法を用い、睡眠覚醒調節や中枢体内時計の神経ネットワークに関する研究を行ってきた。視床下部外側野の神経ペ

チド・オレキシンを産生するニューロンは、覚醒を安定的に維持する上で極めて重要である。オレキシンニューロンの変性により、日中の非常に強い眠気(ひどいと突然眠りこむ睡眠発作が起こる)と情動脱力発作(気持ちが高ぶった時に脱力する)を主徴とする睡眠障害・ナルコレプシーが発症する。我々はナルコレプシーモデルマウスを用い、オレキシンニューロンの下流でナルコレプシーの症状を抑制する神経回路を同定した。

また、中枢体内時計として機能する視床下部視交叉上核は、様々な種類のニューロンが構築する神経ネットワークである。我々は中枢体内時計神経ネットワークの動作原理を理解する目的で、マウス視交叉上核で、特定のタイプのニューロンに特異的に遺伝子操作や神経活動操作を加え、サーカディアンリズムの異常を詳細に解析するアプローチを採ってきた。例えば最近、これまではあまり重要でないと考えられていた視交叉上核のバソプレシン産生ニューロンが、サーカディアンリズムの発振や周期決定に極めて重要な役割を果たしていることを明らかにした。

今後の展望

今後は、これまでのサーカディアンリズム研究と睡眠研究を融合した研究を展開していく。中枢体内時計と睡眠覚醒制御領域を一体の「体内時計・睡眠覚醒システム」として捉え、自由行動下マウスの生体内でのニューロンタイプ特異的な神経活動計測・操作技術を駆使して研究を進める。視交叉上核の中枢体内時計が頑強で安定したサーカディアンリズムを発振し、睡眠覚醒を制御する脳領域へ時刻情報を伝達するメカニズムについて、包括的な解析を行っていきたい。また、このメカニズムが睡眠障害を伴う疾患モデルにおいてどのように変化するかを明らかにし、さらにその変化を解消する方法を開発することを目指す。

このような研究を通して、金沢大学医学類の発展や優秀な人材の育成に貢献したいと考えております。十全同窓会の諸先生方におかれましては、引き続きのご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

社会的背景 ・日本人の5人に1人が睡眠に問題を抱える
・体内時計の乱れで様々な疾患リスク増大

学術的問い 細胞内の時計分子機構は解明されたが・・・
・ニューロンの集合が中枢体内時計として機能
・中枢体内時計の時刻情報の睡眠など生理機能への表出
・体内時計・睡眠覚醒システム変調による疾患の病態生理等のメカニズムはどうなっているのか？

この問いを解くために 正常、疾患モデルマウスの生体内で
・体内時計・睡眠覚醒システムの動態の多層的計測
・体内時計・睡眠覚醒システム変調の光遺伝学による改善

教授就任講演

自閉症の発症メカニズムの解明と創薬開発への応用

～自閉症は大人になっても治せるか？～

組織細胞学 西山 正章

自閉スペクトラム症という疾患概念

自閉スペクトラム症(以下、自閉症)は社会性行動の障害および活動あるいは興味範囲のいちじるしい限局性(固執傾向)を主な特徴とする発達障害であり、さらに、不安の増加や注意力の障害といったさまざまな症状が合併することが多い。発症の頻度は人口の1.5%と非常に高く、社会的な損失の大きさからも病態の解明および治療法の確立が急務となっている。近年、自閉症の患者を対象とした大規模なエキソーム解析により、CHD8遺伝子をもっとも頻度の高いde novo変異遺伝子として報告され、自閉症の原因遺伝子のもっとも有力な候補として注目を集めている。これらの報告から、CHD8の機能異常が自閉症の発症の原因であることが推測されたが、これまで、その発症機構はおろか、CHD8遺伝子の変異が自閉症発症の原因であるという直接的な証拠も示されていなかった。

CHD8ヘテロ欠損マウスは自閉症様の行動異常を示す

自閉症の患者において発見されたCHD8遺伝子の変異はすべてヘテロ変異であったことから、CHD8のハプロ不全が自閉症発症の原因であると推測し、CHD8ヘテロ欠損マウスの行動を解析した。自閉症の患者においてよく観察される不安様の行動について、オープンフィールド試験、明暗選択箱試験、高架式十字迷路試験の3つの独立した行動試験により検証した。その結果、いずれの試験においてもCHD8ヘテロ欠損マウスにおいては不安様の行動が増加したことから、自閉症の患者の特徴が再現されることが示された。次に、社会性行動お

よびコミュニケーション能力を評価する社会的行動試験において、CHD8ヘテロ欠損マウスは初対面のマウスの近くにいる時間は長くなったものの、マウスのコミュニケーションである追いかけて行動や臭い嗅ぎ行動は減少した。この行動異常は一部の自閉症の患者にみられる受動型とよばれるタイプのコミュニケーション障害に似ていた。CHD8ヘテロ欠損マウスにおいて観察されたこれらの表現型は、このマウスが自閉症を発症していることを示唆しており、CHD8のハプロ不全が自閉症の発症の原因となることを意味した。

CHD8変異によるオリゴデンドロサイトの機能不全は自閉症様の行動異常を引き起こす

自閉症発症の原因となる神経細胞種を調べるために、CHD8ヘテロ欠損マウスで脳内の遺伝子発現解析を行ったところ、オリゴデンドロサイト関連遺伝子の発現がもっとも顕著に低下していた。そこで、我々はオリゴデンドロサイトにおけるCHD8の機能に着目した。CHD8ヘテロ欠損マウスはミエリン形成の低下やランビエ構造の異常、神経伝導速度の低下などを示した。さらに、オリゴデンドロサイト特異的CHD8ヘテロ欠損マ

ウスの行動解析を行ったところ、全身CHD8ヘテロ欠損マウスで観察された行動異常の一部が再現されることが判明した。これらの結果から、CHD8はミエリン関連遺伝子の発現を直接制御することによって、オリゴデンドロサイトの分化を制御しており、CHD8変異によるオリゴデンドロサイトの機能異常が自閉症発症の一因を担っている可能性が強く示唆された。

現在進行形の研究と将来展望

CHD8ヘテロ欠損マウスは、原因遺伝子、遺伝子発現のパターン、行動学的な異常など、ヒトの自閉症の特徴を多方面から再現することから、非常に信頼性の高い自閉症のモデル動物であるといえよう。モデル動物は研究ツールとしてだけでなく薬剤スクリーニングにも大いに役立つことから、自閉症の治療法の開発にも貢献するものと考えている。さらに、自閉症との関連が明らかにされたオリゴデンドロサイトは自閉症の新しい創薬ターゲットになりうる。すでに我々は、遺伝学的な手法および再ミエリン化薬剤の投与による治療の実験を進めており、自閉症の治療法への応用について検討している。

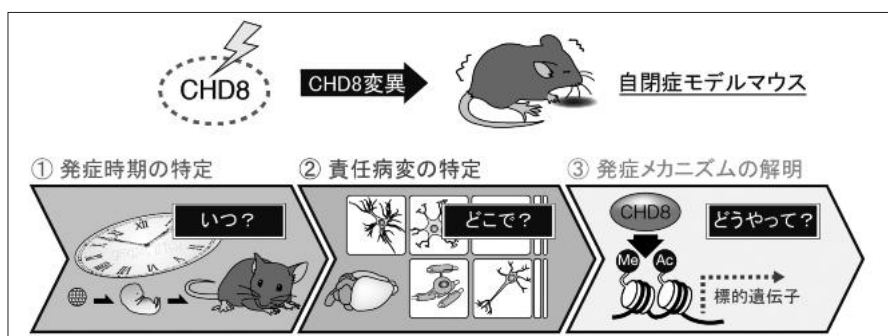


図 ヒト型自閉症モデルマウスを用いた自閉症の発症メカニズムの解明

T細胞分化を制御する 転写因子とクロマチンランドスケープ

分子遺伝学 倉知 慎

免疫記憶は未来の 生体防御を担っている

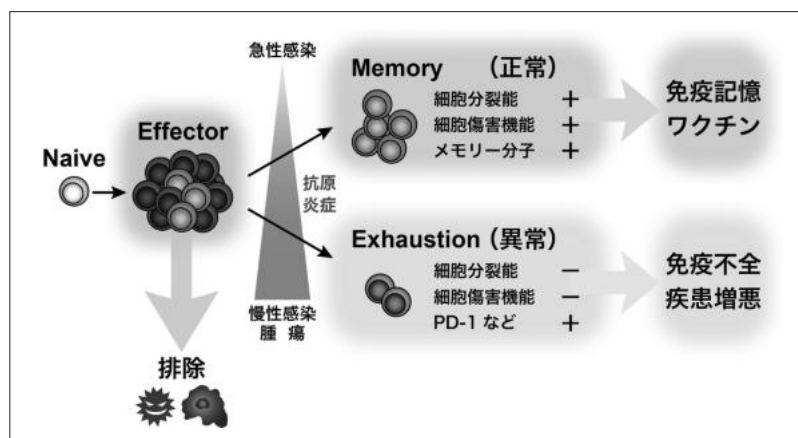
免疫学的記憶は専らリンパ球(B細胞とT細胞)によって担われていますが、なかでもCD8陽性T細胞(Cytotoxic T Lymphocyte; CTL)はその精密な抗原認識力や強力な細胞傷害性から、ウイルス感染細胞や腫瘍など生体内異物に対して最終的な防御機能を果たしています。急性感染症における典型的なCTL応答では、少数の抗原特異的Naive細胞が抗原提示を受けて活性化・増殖し、Effector細胞に分化してウイルス感染細胞などを排除します(図)。大量に産生されたEffector細胞はContraction期に大半が死滅するものの一部が数週間以上かけて機能的なMemory細胞へと分化します。そして非常に長期間に渡り生体内に生存して同一病原体の再感染を予防します。しかし慢性感染症やがん状態ではCTLはしばしばExhaustionと呼称される機能不全(破綻)状態に陥り、疾患増悪を招きます(図)。Exhaustionに陥ったCTLは細胞分裂能やサイトカインの産生性が低下し、抑制性受容体(PD-1など)を発現します。近年、抗PD-1抗体投与により抑制性受容体を阻害するとExhaustion状態のCTLの一部が機能回復を示し、慢性ウイルス感染症や腫瘍のコントロールが可能になることが示されました。即ち、Exhaustionは完全に不可逆な終末像ではなく、適切な介入を行えば破綻状態を修復し、自家免疫担当細胞による副作用が少ない難治性疾患治療が可能になることを意味します。しかしEffector→Exhaustionへの破綻、さらにはNaive→Effector→Memoryへの正常分化ですら、その進展を制御する詳細な分子機序についてはよく分かっていません。従って、総数で

は全世界で数億人単位が罹患している難治性感染症(HBV/HCV/HIVなど)や腫瘍の治療を改善するためにも、Naive→Effector→Memoryへの正常分化と慢性感染症におけるEffector→Exhaustionへの破綻を含むCTL応答の全体像を、正常⇔破綻を比較しながら分子レベルで理解することは極めて重要です。この大きなテーマに対して私達はこれまでに主に(1)反復感染刺激によって既存Memory CTLが直近の応答で誘導された若いMemory CTLにより置換される、Memory CTLの老化とダイナミックな交代現象、(2)ケモカイン受容体CXCR3が活性化後、速やかにCTLに発現し、脾臓内においてCTLの組織内局在を調節することでCTLのEffector⇔Memory分化を制御すること、(3)転写因子BATFがCTL応答の初期段階を決定的に制御していることなどを発見してきました。ここでは転写因子に着目した最近の取り組みについてご紹介します。

パイオニア転写因子による CTL分化制御機構の解明

我々はPD-1シグナルに関連すると報告された転写因子BATFに着目し、

BATFがCTL分化の初期段階を決定的に制御していることを明らかにしました。BATF欠損CTLは分化開始後5-6回分裂した段階で突然99%以上が死滅すること(他の転写因子欠損細胞では見られない劇的な減少)、ChIP-seqによりBATFが3000個以上の遺伝子の調節領域に結合すること、その結合は90%近い確率でIRF4の結合部位と重なること等から、BATFはIRF4をパートナー分子としてCTL分化の鍵転写因子として働くことを明らかにしました。現在、BATFがクロマチン構造の調節開始を行うパイオニア転写因子であると考え、解析を進めています。遺伝子発現を統御するパイオニア転写因子と関連因子の分子間相互作用と階層性、パイオニア転写因子が調節するゲノムワイドなエピジェネティクスの変遷に着目して、細胞分化プログラム分子機序を解明することを目指しています。これらの研究を通じて、金沢大学の免疫学・生化学・分子生物学研究の発展に貢献したいと思っています。また、明日の医学・医療を切り拓くPhysician scientistの育成にも全力を尽くしたいと思っています。十全同窓会の先生方におかれましては今後ともより一層のご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



内 科 再 編

“一つの内科”の理念のもと、 目指す人財(材)育成へ

金沢大学副学長 和田 隆志

2019年4月より金沢大学内科は臓器別に再編され運営されています。このたびの内科再編により、臓器毎の機能単位を再構成するとともに、横断的に“一つの内科”として運営する内科となりました。この内科再編の骨格をなす最も重要な理念は“一つの内科”としてまとめ、運営・発展することです。これは単に7つの臓器別内科に再編したわけではなく、お互いに教育、臨床、研究も有機的に連携し、まとめて運営することを意味しています。全人的医療を行い得る総合的な“内科”としての基本的な考えや臨床能力をまず基盤とする、その上でそれぞれの専門領域を発展させるという多層性の視点を持ち、かつ実践できる内科医こそ金沢大学内科が目指す方向性です。これは幅広い裾野と高い頂を同時に有する山容をイメージしています。この考えは日本内科学会の理念とも一致しています。そのため、この再編は再編自体がゴールではなく、金沢大学内科の目指す教育、

臨床、研究、内科医としての人財(材)育成の重要な手段であると理解しています。

この理念を具現化する一例として、毎朝8時からの内科合同カンファレンスがあります。医学類学生、研修医、専攻医、内科医、他の診療科の先生など内科診療に関わる先生が一堂に集ります。毎朝100名を超える参加者とともに、デスカンファレンスと前日入院した症例の提示があります。この提示症例はその場で指名されるため、緊張感と臨場感を伴ったプレゼンテーションが行われます。それぞれの専門領域のコメント、最新知見が参加者から積極的に寄せられます。各診療科の垣根が低く、さまざまな指摘が寄せられることから患者医療への充実がはかれるとともに安心感にもつながると思います。さらに、内科が一つにまとめることにより、医学教育の充実、共同研究への展開など効果が期待されます。同様に、7つの内科合同のCPCも毎月開催されます。放射線科医、病理医はじめ関係

する専門家も参加し、包括的、全人的に検討することから、金沢大学附属病院の診療全体の向上にも資すると期待されます。

居住スペースにもその理念が反映されています。医員室、助教室は7つの内科に所属する医師が机を並べています。すなわち、それぞれ専門性の垣根をこえてmixtureして日々研鑽に励んでいます。まさに、自分の専門領域にとどまらず、内科領域全般を相談しやすい環境であり、全人的医療の実践にふさわしいと考えます。これは他に類をみない居住空間であり、“一つの内科”を醸成していく基盤となることを楽しみにしています。なお、教授室、事務室などは臓器別内科毎に配置されています。

“一つの内科”という理念のもと、人財(材)育成は内科再編の重要な視点であり、かつ息の長い取り組みです。引き続き金沢大学十全同窓会会員の皆さまの温かいご高導を賜れば幸甚に存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

お知らせ

金沢大学医学部十全同窓会

会員情報変更サイトを

ご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

LOGIN情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせしております。ご不明な点は事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp



ヘリポートの運用開始

ドクターヘリと防災ヘリの 離着陸に対応

金沢大学附属病院長 蒲田 敏文

令和元年6月よりドクターヘリの運用を開始しました。十全同窓会の会員の皆さまにこれまでの経緯を説明させていただきます。金沢大学附属病院の再開発工事により完成した外来中央診療棟の屋上にはヘリポートが造られました。しかし、中央診療棟の前にゴミ焼却棟がありヘリが飛べない状況であったため、ヘリポートは工事が中断され未完成のまま放置されていました。10数年前にゴミ焼却棟が撤去されたにもかかわらず、ヘリポートの完成工事はされないまま時が流れました。

平成28(2016)年4月に私は病院長に就任しました。院長室の近くに置かれた附属病院完成模型を見たところ、屋上ヘリポートにはドクターヘリの模型が置かれていました。私は大学病院にヘリコプターが飛んできたのを一度も見たことがありませんでした。病院総務課長にその理由を聞いたところ、ゴミ焼却棟が撤去された後もヘリポートの完成工事を行わなかった理由の一つは高額な工事費であったようです。平成30年度の秋には石川県立中央病院がドクターヘリの運用を開始することが決まっていたの

で、それにあわせてなんとか金大病院のヘリポートを完成させたいと強く決意しました。工事費の見積りでは、ドクターヘリのみ離着陸する場合には約1000万円の投資ですむことが分かりました。しかし、私は病院長として防災ヘリも絶対離着陸できるようにするべきと主張しました。その理由は、東日本大震災のような大きな災害が北陸で発生した場合を想定したからです。小立野台地という比較的高い場所で地盤も強固な土地に立地する金大病院が災害医療の拠点になるべきであり、夜間飛行可能な防災ヘリが飛べるようにすることは大学病院の使命である考えたからです。夜間照明や防災ヘリに対応した消防設備を設置し、ドクターヘリと防災ヘリの両方の離着陸に対応したヘリポートの整備には約5000万円の費用がかかりましたが、平成31(2019)年の3月末には工事がすべて完了しました。その後、県の実地検査と飛行の承認を受けた後、令和元年5月30日に初めてドクターヘリのテスト飛行が行われました。県立中央病院を飛び立ったヘリコプターが金大病院屋上のヘリポートに無事着陸した時には苦勞が報われた気がし

ました。県立中央病院のドクターヘリ運用開始から8ヶ月遅れての運用開始となりましたが、その後、順調にドクターヘリの運用が行われています。ドクターヘリによって少しでも多くの救急患者を救うことができるといいなと期待しています。

令和元年9月中旬には防災ヘリの試験飛行を実施します。このテスト飛行には院長自らヘリに搭乗する予定にしております。防災ヘリは県境を越えて飛行することができます。災害対応のみならず、他府県の専門病院への患者の緊急搬送、移植臓器の輸送など多方面での活用が期待できます。現在、外来診療棟4階にある病院長室の壁にはドクターヘリがヘリポートに着陸する瞬間をとらえたパネル写真が飾られています。毎朝この写真を見ると、今日一日病院のために頑張ろうという気持ちになります。また、院長室には今年の5月に撮影した樹齢300年の真っ赤な“のとキリシマツツジ”と一本松のパネル写真も飾ってあります。病院に来られる機会がありましたら、これらの写真を見にぜひ病院長室までおいでください。お待ちしております。



受賞

春の叙勲

瑞宝中綬章

木田 寛
(昭和41年卒業)

高田 正信
(昭和48年卒業)

山田 哲司
(昭和50年卒業)

旭日双光章

紺谷 一浩
(昭和46年卒業)

瑞宝双光章

多賀谷正順
(会員Ⅱ)

新鞍 保
(会員Ⅱ)

受賞された岡本宏名誉教授へのお祝いの言葉

第16回 日本内分泌学会マイスター賞

岡本 宏
(昭和39年卒業)
東北大学名誉教授
金沢大学名誉博士

令和元年5月9日～11日に仙台国際センターを中心に開催された「第92回日本内分泌学会学術総会」において、東北大学名誉教授・金沢大学名誉博士の岡本宏先生に第16回日本内分泌学会マイスター賞が授与されました。この賞は、日本国内で行われた研究により、内分泌学領域に卓越した足跡を残した研究者に顕彰されるもので、日本内分泌学会では最も名誉ある賞となります。

ここ5年間の本賞受賞者は、大隅良典博士(第12回2015年度／2016年ノーベル生理学・医学賞受賞)、本庶佑博士(第13回2016年度／2018年ノーベル生理学・医学賞受賞)、森和俊博士(第14回2017年度)、柳田充弘博士(第15回2018年度)と錚々たる先生方で、今年2019年の第16回は岡本宏先生の受賞

となりました。

岡本宏先生は、細胞の生・老・病・死さらには再生のメカニズムを明らかにしようと考え、膵β細胞のインスリンの合成機構や分泌機構、膵β細胞の再生に関する研究を行ってこられました。なかでも、インスリン産生膵β細胞の死とその防止機構についての「岡本モデル」の提唱、新しいインスリン分泌機構であるCD38-cyclicADP-riboseシグナルシステムの発見、インスリン産生細胞などの増殖因子であるReg(Regenerating gene)ファミリーの単離・同定など、卓越した足跡を残されてきました。

今回の受賞講演では、「再生遺伝子Regの発見とその生理・病理的意義」というタイトルで、Reg遺伝子とRegタンパク、そして、その受容体系が、膵β細胞以外のさまざまな細胞の再生にも関わるとともに、がん発生とがんの悪性度に寄与することについても述べられました。将来的には、REG-REG受容体系を生体バイオマーカーや臓器の再生へと応用すること、そして、がんの治療標的として臨床応用することも提唱されています。また、受賞講演前日の特別講演では、CD38-cyclicADP-riboseシグナルシ

ステムについてお話をされました。

岡本宏先生は、これまでもこのような多大な功績により、武田医学賞、ベルツ賞、紫綬褒章、日本学士院賞など国内外の多くの賞を受章(賞)されています。後進一同、改めて、これまでの岡本宏先生の偉業をたたえとともに、明日の研究のモチベーションにしていきます。

(山本 靖彦：記)



左から岡本宏先生と赤水尚史・日本内分泌学会代表理事

平成31年度科学技術分野 文部科学大臣表彰若手科学者賞

平安 恒幸

(特別会員)

先進予防医学研究センター特任准教授

この度、平成31年度文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞いたしましたことを謹んでご報告申し上げます。本賞にご推薦いただきました金沢大学ならびにサポートしていただきました全ての方に心より感謝申し上げます。

受賞業績名であります「白血球レセプター複合体と病原体との相互作用に関する研究」は、私が大学院生時代から継続して取り組んできた研究であります。白血球レセプター複合体とは、ヒト19番染色体長腕に位置する遺伝子領域のことであり、免疫レセプターであるLILRファミリー(13遺伝子座)やKIRファミリー(17遺伝子座)などの多重遺伝子ファミリーが多数コードされております。しかしながら、白血球レセプター複合体の機能については、これまで十分理解されておりました。そこで本研究では、病原体に着目し、白血球レセプター複合体と相互作用するリガンド分子を網羅的に探索しましたところ、幸運にも活性化レセプターLILRA2および抑制化レセプターLILRB1のリガンド分子を同定することに成功しました。その結果、LILRA2が抗体から逃れた細菌を検知すること、LILRB1がマラリア原虫の分子RIFINを認識してマラリア原虫による免疫逃避機構に利用されることを明らかにすることができました。

このような研究背景に基づき、現在では病原体だけでなく、マイクロバイオーーム、腫瘍細胞、環境因子等にも着目し、白血球レセプター複合体との相互作用から疾患や健康の理解を目指して研究に取り組んでいる次第であります。

改めまして、これまで継続して行ってきました白血球レセプター複合体の多様性と機能に関する研究が評価されて、名

誉ある賞を賜りましたことは誠に光栄に存じます。今後におきましても本研究を進展させて成果が出せるように努めてまいります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

第15回 金沢大学十全医学賞

近藤 悟

(平成11年卒業)

金沢大学医薬保健研究域医学系

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学

この度、第15回金沢大学十全医学賞を、「ウイルスによる頭頸部癌発癌・転移機構の解明」で選出いただき、大変光栄で恐縮する次第であり感謝申し上げます。

中咽頭に存在する口蓋扁桃、上咽頭に存在する咽頭扁桃はワルダイエル輪を構成する免疫装置で、エプスタインバーウイルス(EBV)に関連する上咽頭癌、ヒト乳頭腫ウイルス(HPV)に関連する中咽頭がんが惹起されます。この狭い領域に異なったウイルスにより悪性腫瘍が発生する機序は不明で、その解明を目指し研究を行ってきました。上咽頭がんは、EBVによって発がんする高転移性のがんです。我々は、EBVがん遺伝子の潜伏膜蛋白1(LMP1)が、Siah1という低酸素関連分子を介し転移を誘導し、その発現は予後不良因子であるということを見しました。また、LMP1は転移だけでなく近年提唱される「がん幹細胞」性を誘導する必須因子であることを示しました。一方で、先進国でHPVによる中咽頭がんの発症が急激な増加が問題です。我々は、内因性免疫APOBEC3が発がんのトリガーのインテグレーションを誘導する可能性を報告しました。なぜ、これらの2つの悪性腫瘍の母地が異なるのか理由は分かっていません。我々はEBV関連上咽頭癌組織中のHPV陽性率を検討すると、HPV陽性であったのは僅か2例で

した。また、我々は口蓋扁桃と咽頭扁桃のEBV量を検討すると咽頭扁桃にEBV量が多く、EBVの咽頭扁桃への指向性が示唆されました。今後、さらにこれらのウイルス発癌の研究を継続し新規治療の開発につなげていきたいと存じます。

今回の受賞にあたり、あらゆる面からご指導いただきました金沢大学耳鼻咽喉科頭頸部外科学教授吉崎智一先生をはじめ、教室、国内外の共同研究者の先生方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導のほどどうかよろしくお願いいたします。

第17回 高安賞

高安賞は平成15年、本学昭和39年卒業の臼井滋先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会(主査および副査)と専攻長等から構成される選考委員会の2段階で行われ、医薬保健学総合研究科・先進予防医学研究科合同運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。

令和元年度受賞者には、次の3名が選ばれた。

最優秀論文賞

中出 祐介(平成30年度大学院修了)

血液情報統御学

Gut microbiota-derived D-serine protects against acute kidney injury. (腸内細菌由来D-セリンの腎保護効果)
The Journal of Clinical Investigation insight 平成30年掲載

優秀論文賞

篠崎 康之(平成17年卒業)

恒常性制御学

Impairment of the carnitine/organic cation transporter 1-ergothioneine axis is mediated by

受賞

intestinal transporter dysfunction in chronic kidney disease.
(慢性腎臓病では、腸管トランスポーターの機能不全によってカルニチン/有機カチオントランスポーター 1-エルゴチオネイン系が障害される。) Kidney International 平成29年掲載

優秀論文賞

齊藤 夕貴(平成30年度大学院修了)

分子神経科学・統合生理学

Monoamines Inhibit GABAergic Neurons in Ventrolateral Preoptic Area That Make Direct Synaptic Connections to Hypothalamic Arousal Neurons.

(視床下部の覚醒ニューロンに直接シナプスを形成する視索前野のGABA作動性ニューロンはモノアミンにより抑制される。) Journal of Neuroscience 平成30年掲載

令和元年7月6日(土)開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で堀修医薬保健学総合研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

(堀 修:記)

第15回 黒川良安賞・スロイス賞

黒川良安賞受賞

北山 祥平(令和元年卒業)

曾根 渉(令和元年卒業)

永井 幸輔(令和元年卒業)

スロイス賞受賞

坂賀 綾(3年次修了)

真智 耕介(3年次修了)

吉田 遥香(3年次修了)

医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授与が行われました。今回で15回目を迎えました。なお、両賞は医王保護者の会の支援を受けております。

第15回黒川良安賞は平成30年度卒業生の成績優秀者上位3名に授与されました。今回は3月22日の学位記授与式の席上で、北山祥平さん、曾根渉さん、永井幸輔さんの3名が受賞しました。

また、スロイス賞は、3年次を修了した学生のうちから坂賀綾さん、真智耕介さん、吉田遥香さんの3名が成績優秀者として受賞しました。5月25日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与されました。

(和田 隆志:記)

学会報告等

第122回日本小児科学会学術集会開催

日時/ 2019年4月19日(金)～21日(日) 場所/ 石川県立音楽堂ほか

2019年4月19日(金)～21日(日)の3日間にわたり第122回日本小児科学会学術集会が開催されました。天候にも恵まれ、6000名を超える参加者が全国から集まりました。今年の学会のテーマは、「ここに生まれた君を守り、未来に輝く君を支える」としました。「子どもたちの総合医」である小児科医の将来を見据えて、多様な分野にわたり魅力的なシンポジウムや講演が企画され、おかげさまで大好評のうちに終えることができました。本学術集会の主題の一つとしてAIを

取り上げました。「東大口ボ」開発でも有名な、国立情報学研究所の新井紀子先生には『人工知能がもたらす人間と社会の未来』と題する基調講演をお願いしました。さらに、この分野の先駆者によるシンポジウムでは、AIの医療への応用が議論されました。

特別講演では、私自身の長年の知己である2人のトップリーダーに小児科医に向けてご自身の研究のご紹介をいただきました。AMED理事長末松誠先生には、ガスバイオロジー研究について、国・国

際医療研究センターの満屋裕明先生にはHIV感染症治療薬の開発についてご講演いただきました。

北陸4大学の若手小児科医が企画した「ボーッと学会きてんじゃねえよ！日本の小児医療をもっとチームに」も多くの参加者を得て、大好評でした。また懇親会にもたくさんの方々が出席してくださり、御陣乗太鼓の演奏にはその迫力に驚き、深く感動してくださったようです。最終日には、3日間の学会を高い評価を得て終えた喜びを医局員と共有できたこ

とは感謝でした。写真に映る医局スタッフの表情からは達成感と心地良い疲れ、

そして満足の気持ちが読み取れます。ご支援いただきました十全同窓会の皆さま

に心よりお礼を申し上げます。

(谷内江昭宏：記)



第105回日本消化器病学会総会

日時／令和元年5月9日(木)～11日(土) 場所／石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ANAクラウンプラザホテル、ホテル金沢

令和元年5月9日から11日の3日間、石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ANAクラウンプラザホテル、ホテル金沢において第105回日本消化器病学会総会を開催しました。平成から令和へ変わる10連休直後にもかかわらず、5000人を超える方々に参加していただきました。

日本消化器病学会は現在の会員数は約34500人となっており、消化器内科の領域では最も大きな学会であります。金沢大学ではこれまで秋季大会(後の大会で現在はJDDWに参加)を昭和45年に武内重五郎教授、昭和61年に服部信教授、平成14年に小林健一教授が会長を務められました。総会の会長は金子周一教授が初めてであります。

今回のメインテーマは「消化器病学の使命～医療の創生、そして世界へ」として、医療の創生につながるような情報を交換し、医療を創生し世界へ展開するために消化器病を専門とする先生方がどのような使命があるのかを考えてもらえるような学会となることを目標とし、消化器病に関連した医薬品や医療機器を開発

しそれらを医療に結びつけ、さらに世界への展開に成功した先生方や消化器病学以外でグローバルな視点から日本をみることでできている先生方に講演を依頼しました。

学会では主題39題を企画し、一般演題と併せて約1300題もの演題を発表いただき、消化器病学の最先端のトピック

スを発表・議論していただきました。

会期中は天候にも恵まれ、盛会のうちに無事閉会することができました。本総会にご協力いただきました十全同窓会をはじめとした皆さまに改めて感謝をいたします。

(第105回日本消化器病学会
総会事務局長 山下 竜也：記)



金子周一教授の会長講演

学 会 報 告 等

第40回癌免疫外科研究会開催

日時／令和元年5月16日(木)、17日(金) 場所／金沢市文化ホール、金沢ニューグランドホテル

令和元年5月16日、17日の2日間、第40回癌免疫外科研究会を金沢市文化ホールおよび金沢ニューグランドホテルにて開催しました。

本研究会は昭和55年に第1回が開催されて以来、癌免疫学に関する基礎研究と“BRM免疫療法”に始まり、“がんワクチン療法”や“免疫細胞療法”といった臨床応用を推進・発展させてきました。今回の研究会の主題は「Precision Medicine(精密医療)の幕開け」と「癌微小環境の制御と免疫応答の効率化」とし、がん治療にパラダイムシフトを起こした“免疫チェックポイント阻害剤”の治療効果予測因子の解明や免疫細胞療法などを併用した複合的免疫療法の最近の話題について議論していただきました。さらには、がん局所におけるMDSC, Treg, TAMなどの免疫抑制細胞群の制御法や腫瘍内T細胞の浸潤促進にむけた治療法の工夫や“neoantigen”を誘導し免疫標的にする試みについても深く議論されま



した。

本研究会の発展と奨励を目的に「癌免疫外科研究会奨励賞」は3名の若手研究者に贈呈され、彼らの今後の活躍が期待されます。

全員懇親会では、地元の横笛奏者である藤舎真衣さんによる凜とした演奏に参加者は息をのむように静かに聞き入り、

金沢芸能も堪能していただきました。

会期中は好天に恵まれ、240名の参加登録をいただきました。本研究会を盛会のうちに終えることができましたのも、同門会の先生方を含め関係各位のおかげと熱く感謝申し上げます。

(伏田 幸夫：記)

第43回日本頭頸部癌学会報告

日時／令和元年6月13日(木)、14日(金) 場所／ホテル日航金沢、金沢市アートホール

令和になって初の日本頭頸部癌学会を6月13日および14日に開催しました。

加速度的に知識や技術が増殖する分野

もあれば、なかなかブレイクスルーがないものの着実に進歩し続ける分野など、頭頸部癌診療の進歩とひと言でいっても

多様です。そこで本学会のテーマは「斬新、先進、漸進」とし、さまざまな分野における臨床、研究がどのように進んで



いるのか、飛躍的に進んだのであればそれは何が原因であるか、また、「3歩進んで2歩下がる」ような状態の分野では何が問題であるのかを掘り下げることとしました。

特別講演2つを設けました。一つはすでに始まっているArtificial Intelligence (AI)の時代、まずはAIというものをしっかり理解し、そのインパクトと何が問題でこれからどう向かい合っていくべきか、

という私たちの疑問に対して、国立情報学研究所新井紀子教授にご講演いただきました。もうひとつは高速原子間力顕微鏡のがん研究への応用について金沢大学ナノ生命研究所古寺哲幸教授にご講演いただきました。

International Session "Nasopharyngeal Carcinoma"では上咽頭癌の手術でどこまで攻めることができるか、照射モダリティと化学療法の

エビデンスから見た上咽頭癌治療の進歩、バイオマーカーとしてのEBウイルス研究の進歩について討論しました。

シンポジウム7テーマ、パネルディスカッション2テーマ、教育講演3テーマを企画しました。本会は関係各位のご尽力のおかげで約1300名にご参加いただき、成功裡に幕を降ろすことができました。

(吉崎 智一：記)

令和元年度金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会開催報告

日時／令和元年6月27日(木) 場所／金沢大学十全講堂

去る6月27日(木)に金沢大学十全講堂において、令和元年度金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会が開催されました。

総会では、まず庶務担当理事の中村裕之先生より庶務報告、会計担当理事の中田光俊先生から会計報告、編集担当理事の杉山和久先生による編集報告が行われ、その内容が承認されました。続いて優秀原著論文賞の授賞式が行われ、金沢大学医薬保健研究域医学系機能再建学の岡本駿郎先生、金沢大学医薬保健研究域医学系小児科の黒田梨絵先生が受賞されました。そして、平成30年度(第15回)十全医学賞授与式ならびに十全医学賞受賞記念講演が行われました。今回、十全医学賞は金沢大学医薬保健研究域医学系耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の近藤悟先生が受賞されました。近藤先生の受賞研究課題名は、「ウイルスによる頭頸部癌発癌・転移機構の解明」で、受賞記念講演ではこれまでの研究成果について紹介されました。金沢大学十全医学会雑誌の第127巻第3号に掲載されていますので、ぜひ

ご一読いただければ幸いです。

また、本年度の学術集会は、学術集会担当理事の河崎洋志先生、篁俊成先生、華山力成先生が中心となって、そのテーマを「細胞の品質管理」とし、外部講師として現在内外で八面六臂の活躍を繰り返しておられる森和俊先生(京都大学大学院理学研究科生物物理学教授)、水島昇先生(東京大学大学院医学系研究科分子生物学教授)をお招きし、「小胞体の機能と制御のダイナミクス」、「オートファジー：細胞内の分解システム」と題して講演をしていただきました。さらに、学内講師としてRichard Wong先生(金沢大学ナノ生命科学研究科教授)、Yuri Korchev先生(Imperial College London／金沢大学ナノ生命科学研究科教授)にも加わっていただき、「分子ナノゲート核膜孔複合体の動的構造と機能と病態」について、さらには「単一細胞計測のためのナノピペットバイオセンサーの開発」について、最新の知見



を交えながら分かり易く教育的に講演をしていただきました。今回の学術集会は、5時間にもおよぶ長丁場でありましたが、それでも最後まで質疑応答が活発に行われ、参加者の皆さま方の関心の高さに驚かされた次第です。500名以上の聴講者で盛大な会になりました。最後になりましたが、本学術集会の開催に向けてご尽力を賜りました関係者各位ならびに学術集会に参加していただきました会員の皆さま方に心より感謝申し上げます。

(十全医学会会長 土屋 弘行：記)

学 会 報 告 等

令和元年度金沢大学十全医学会学術交流会開催報告

日時／令和元年7月6日(土) 場所／石川県政記念いのき迎賓館

令和元年7月6日(土)に金沢大学十全医学会学術交流会が、石川県政記念いのき迎賓館(金沢市)を会場として開催されました。本交流会は、金沢大学医学系に深く関わりがあり、各地の大学や研究所などでご活躍の先生方(主に十全医学会評議員)の情報交換を目的として企画されました。加速度的に進む医学・医療の発展、少子高齢化、地域や財政(各種保険制度)の疲弊など、医学界が直面し取り組むべき問題はますます増大、複雑化しています。これらの諸問題に立ち向かい、課題先進国の我が国から新しい医学・医療を継続的に世界へ発信していくためには、何よりも時代を切り拓く優秀な医学・医療人材の養成が必要です。そして、金沢大学医学系は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」および「北陸地域の中核的医学・医療拠点」として、世界の医学界で活躍できる医学・医療人材を育成し、送出していく大きな社会的使命を負っています。この使命を果たすためには、金沢大学医学系に縁があって、志をともにする医学・医療関係者の組織化や情報共有・交流が極めて重要と考えられます。

初めての試みではありましたが、全国および金沢大学から60名の参加者を得

て交流会を盛会裏に終えることができました。土屋弘行十全医学会会長の挨拶に続き3名の先生方の講演がありました。金沢大学附属病院泌尿器集学的治療学講師の泉浩二先生(平成13年卒業)には「前立腺癌の進展と薬剤耐性化におけるケモカインの役割」、大阪大学大学院医学系研究科内分泌代謝内科学講師の西澤均先生(平成7年卒業)には「内臓脂肪蓄積の臨床的意義と内分泌・代謝学」と題したご発表を、最後に信州大学名誉教授・地域医療推進学教室特任教授の田中榮司先生(昭和53年卒業)から「B型肝炎診療に

おけるHBcr抗原測定の意義」と題した特別講演をしていただきました。

引き続き催された懇親会では、中村信一金沢大学十全同窓会長のご挨拶の後、全国から参加された先生方の紹介が行われ盛んな意見交換が行われました。最後に和田隆志金沢大学医学系長から閉会のご挨拶をいただき、本交流会を次回以降さらに発展させていくことを約して散会となりました。ご参加いただきました先生方ならびにご支援をいただきました十全同窓会に厚く御礼を申し上げます。

(倉知 慎：記)



令和元年度金沢大学関連病院長会議

日時／令和元年7月6日(土) 場所／金沢大学附属病院4階宝ホール

令和元年度金沢大学関連病院長会議は令和元年7月6日(土)14時半から金沢大学附属病院宝ホールにて、北陸3県を中心とした85の関連病院から66名の院長ならびに代理の出席を得て開催されました。今回新たに二ツ屋病院(石川県)、藤田記念病院(福井県)、久藤総合病院(石川県)が入会しました。会長の高田重男金沢

市立病院長が開会の挨拶をされ、佐久間寛芳珠記念病院長が議長に選出され、平成30年度の事業報告、会計報告、令和元年度事業計画、令和元年度収支予算(案)が説明され、承認されました。

その後、大学病院の新任診療科長として、高村雅之循環器内科長、菊池充神経科精神科長、和田泰三小児科長、出村論

背椎・背髄外科長、池田博子病理部長の紹介と、新任病院長として越田潔金沢医療センター病院長、藪下和久高岡市民病院長、河合博志市立砺波総合病院長、太田筆市立敦賀市民病院長の紹介が行われました。

各ブロック会議からの報告では、特に富山ブロック(竹田黒部市民病院長)から

は、①今年度行われた内科再編に伴う今後の内科医師確保に関する不安について、②働き方改革の影響について、③定年退職を迎える医師および産休・育休を取得する医師への補充・派遣についての要望がありました。

続いて意見交換会が行われました。蒲田附属病院長の挨拶の後に①大学附属病

院における画像診断報告書の確認不足に関する医療安全の徹底について、②臨床研修の動向に関する話題提供、③参加型臨床実習後客観的臨床能力試験(Post-CC OSCE)評価者派遣のお願い、④附属病院の新任診療科長および新任病院長からのワンポイントメッセージの順に討議されました。その後、自由討議として参加病

院長からの各病院の現状報告と大学への要望や質問が出され、蒲田病院長、和田医学類長、大竹病院担当理事が回答しました。16時半にすべて議題が終了し、閉会となりました。

(蒲田 敏文：記)

御遺骨返還式・合同慰霊祭

日時／令和元年6月15日(土) 場所／金沢大学十全講堂

令和元年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は午前10時、文部科学大臣感謝状伝達式から始まりました。羽村典子総務課長による開式の辞に引き続き、和田隆志医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆さまに述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前10時半から、ご遺族の皆さま、しらゆり会会長井沢義武様、理事長清水誠一様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆さまにご出席いただき、和田隆志医学類長、医学系と附属病院の教職員、学生が出席して始まりました。名誉会員35名のご冥福を祈って黙祷をささげた後、祭主の和田隆志医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、和田隆志医学類長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して島滝駿佑君(3年生代表)が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学教授尾崎紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後1時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆さまのご臨席を仰ぎ、和田隆志医学類長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治20年

設置の第四高等学校医学部から現在に至るまでの、約6千名の献体者の芳名墓碑が37あり、井沢義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第117回合同慰霊祭は午後2時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた150名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆さまのご臨席を仰ぎ、和田隆志医学類長、蒲田敏文附属病院病院長、医学系と附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、和田隆志医学類長が追悼の言

葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に蒲田敏文病院長が謝辞を述べられ、慰霊祭は滞りなく終了しました。

7月3日(水)、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者孟蘭盆会法要が営まれました。和田隆志医学類長をはじめとする医学系の教職員多数の方々ที่参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成14年10月に修造してくださったホルトルマン(金沢医学所教師)愛児(明治9年～10年歿)の墓碑にも奉拝しました。

(尾崎 紀之：記)



十全学術行脚

第29回 | ボストン |

1. 広瀬 竜夫 教授(昭和36年卒業)

ハーバード大学眼科



研究には金が必要だ。アメリカでは研究資金を供給する多数の財団のなかで最も重要な資金源はNational

Institute of Health (NIH)などのアメリカ政府である。NIHのgrantには単に研究に直接必須の額を提供するだけのgrantから研究者の論文、給料、学会出席の為の旅費、ホテル、食事代、共同研究者や技師の給料、研究室の借り賃、光熱費、研究所全体に必要な経費まで含まれる高額のgrantまである。Grantを獲得するために研究者は努力せねばならない。NIHのgrantは競争率が高く、研究者として生きていけるかどうかは研究費の獲得にある。この激しい競争のなかで長年資金獲得に成功した横綱級のスター研究者たちがいる。

2. Haruka Badger (平成13年卒業)

ブリガム アンドウィメンズ病院



約1500名の患者さんのかかりつけ医として、一人ひとりの病歴やリスクに加え、性格や価値観、社会的背景も含め把握

し、ケアする仕事をしています。医師になる前は一市民としてハワイで10年暮らしていました。ありとあらゆる人生相談を受ける今、その時の経験が役に立っています。最新のガイドラインや治療選択肢は患者さんもスマホで調べる時代です。ネットに載っていない部分に、誰が主治医として寄り添うのかの意味があると感じています。



ロングフェロー橋とビーコンの丘

3. 中河 秀俊(平成17年卒業)

ダナ・ファーマーがん研究所



卒業後、黒部市民病院にて臨床研修を行った後、金沢大学に戻り消化器内科(金子周一教授)を専攻いたしました。平成

20年からは大学院にて本格的にがん免疫分野の研究を開始し、富山大学免疫学教室(村口篤教授)への国内留学を経て、平成27年6月よりダナ・ファーマーがん研究所のDr. Harvey Cantorの元で主に制御性T細胞の研究を行なっております。留学期間中幸いにもいくつかの外部fellowshipを獲得でき、4年以上研究を続けることができました。今後もこの分野を牽引できるよう研鑽に努めて参ります。

4. 末田 善彦(平成17年卒業)

マサチューセッツ総合病院



2005年に卒業しました末田善彦です。卒後は沖縄で臨床だけの生活をしていましたが、2016年より米国の大学院に入学

して生物統計・疫学を勉強し、2018年よりマサチューセッツ総合病院で研究員をしております。米国の生活にも慣れ家族も生活を楽しんでいます。もともとは腎臓内科医でしたが、現在は機械学習の医療への応用と疫学全般を研究テーマにしています。ProteomicsなどのOmics研究などにも今後は幅を広げていく予定で、これまで学んだ知識を活かしていける場所と信じ日々精進しております。

5. 井川 寛章(平成25年卒業)

ジョスリン糖尿病センター



金沢大学を平成25年に卒業し、金沢大学附属病院および関連病院で臨床研修を修了した後、平成27年に恒常性

制御学(旧第一内科)へ入局しました。内分泌・代謝内科での臨床と並行して基礎研究を行い、平成30年に学位を取得しました。平成30年4月より、Joslin Diabetes Center(Steven Shoelson Lab.)へ留学し、糖尿病と慢性炎症に関する研究を行なっています。言語や文化など異なる背景をもった研究者とともに働き、Scienceという共通の課題に挑戦する日々はとても刺激的で充実しています。ボストンでも十全同窓会の先生方に公私ともにお世話になっており、金沢大学同門の幅広いネットワークのありがたさを実感しています。

6. 原島 愛(平成19年度大学院修了)

ジョスリン糖尿病センター



2007年に血管分子生物学教室(旧生化学第二)で博士課程を修了し、その後、マイアミ大学で5年半の研究生活を送り、2013年に特任助教として血管分子生物学教室に着任しました。2016年からは助教として教育・研究に携わり充実した日々を送り、山本靖彦教授が主担当研究者である「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」により2018年からハーバード大学ジョスリン糖尿病センターに派遣され、有意義な研究生活を送っています。今後は、世界で活躍できる研究者の育成にも携わりたいと思っています。

7. 寺本 了太(平成30年度大学院修了)

ブリガム アンドウィメンズ病院



2017年より金沢大学附属病院循環器内科からBrigham and Women's Hospitalに研究留学させていた

だいています。ゲノム編集や心筋細胞膜電位の光学マッピングなどの技術を学びながら、ゼブラフィッシュを用いた家族性心筋症に関連する遺伝子機能解析を行なっています。循環器の臨床でしばしば遭遇する心筋症のダイナミックな形態の変化を、分子遺伝学の立場から解明するという壮大なテーマですが、PI(principal investigator)であるMacRae博士(同院心血管部門チーフ)の的確な指導の下、世界中から集まるラボスタッフに囲まれ刺激的な毎日を送っています。

8. 南 太一郎(会員II)

ブリガム アンドウィメンズ病院



東北大学を2010年に卒業し、地元である金沢大学腎臓内科に2013年に入局させていただきました。学生時代は研究にはそれほど興味はなかったのですが、学会の際にボストンを訪れた際の印象が強く、漠然とですが留学を志し研究を続けてきました。今回思いがけず和田教授からお話をいただき、6月よりBrigham and Women's HospitalのRenal Divisionに留学をしています。主にループス腎炎モデルマウスを使い基礎実験を行っています。こちらでは十全同窓会の結びつきも強く、会食などを通じて交流や情報交換が行われています。ボストンは大学や企業も多くあり、緑も多く本当にきれいで住みやすい街です。これから環境に感謝しながら留学を通じて成長できるように研究に励んでまいります。



病院紹介

珠洲市総合病院

地域の需要に応え 病床数を調整

当院は昭和25年10月6日珠洲郡中央病院として開院しました。昭和29年の市制施行を経て、昭和42年9月には総合病院の指定承認を受け、国民健康保険珠洲市総合病院と改称し、平成9年6月新病院に移転するとともに珠洲市総合病院と改称し現在に至っております。

病床数は開院当初45床で、一般病床30床、伝染病病床15床として始まり、昭和39年6月の救急告示病院指定を経て、昭和42年9月に総合病院の指定承認を受けた時には140床で一般病床100床、結核病床30床となりました。その後平成9年6月からの新病院は199床で一般病床160床、療養病床32床、結核病床7床を4病棟で運営しておりましたが、平成12年から年々入院患者数が減少し病床稼働率が悪化してきたため、平成31年4月からは、病床数163床3病棟で、一般156床、結核病床7床、一般病床のうち52床を地域包括ケア病床としております。

標榜科は12科で、常勤がいるのは内科、外科、小児科、産婦人科、整形外科、耳鼻咽喉科、脳神経外科で、非常勤

のみの科は泌尿器科、皮膚科、眼科、精神科です。内科常勤は自治医科大学卒の専門研修医2名、金沢大学特別卒の専門研修医2名を派遣してもらっているのと、定年後再就職していただいた医師3名の計7名です。幸い数的には充足した形となっておりますが、年齢的には若手と大ベテランに二極化して、間が抜け落ちているのが現状です。40歳から50歳ぐらいで病院の核になるような内科医師に赴任してもらって、診療とともに研修医の指導を担っていただけることを切望しています。金沢大学の学生の実習を受け入れていく上でも、その指導を担ってもらうために是非お願いしたいと思っております。

また当院では、内視鏡検査、内視鏡治療の需要が多いこと、人工透析を行っていることから、内科の専門分野の中でも消化器内科医、腎臓内科医が必須です。消化器内科については県が何とか常勤を派遣していただいている、常勤医不在の腎臓内科は輪島病院から非常勤を派遣していただいておりますが、次の年も継続できるか毎年心配しているのが現状です。

多大なご支援のもとで 地域医療を支える

そんな中、令和2年度から金沢大学腎臓内科より1名派遣していただくことになりました。金沢大学の内科診療科が臓器別になったことで、これまでの枠組みにとらわれることなく専門分野ごとに医師派遣を考えていただけた結果であり、大変画期的で、当院がその恩恵を受けることができたと思っております。

内科以外の常勤医はすべて金沢大学からの派遣と就職で、非常勤は、内科が金沢大学、恵寿総合病院、輪島病院、穴水総合病院から、外科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、脳神経外科、泌尿器科は金沢大学から、皮膚科は穴水総合病院と能登総合病院から、眼科は恵寿総合病院から、精神科は宙クリニックと能登総合病院からそれぞれ派遣していただいております。

このように、当院は十全同窓会の皆さまから多大なご支援をいただいております。今後も当院が地域医療を続けていくためにも、引き続きお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

(院長 浜田 秀剛：記)

概要

珠洲市総合病院	
所在地	石川県珠洲市野々江町二部1-1
病院長	浜田 秀剛
病床数	163床
診療科数	13

沿革

昭和25年	厚生医療組合立珠洲郡中央病院として開院
昭和35年	「珠洲市国民健康保険中央病院」と改称し、珠洲市営病院として発足
昭和42年	総合病院の指定承認・病院の名称を「国民健康保険珠洲市総合病院」と改める
平成9年	「珠洲市総合病院」として珠洲市野々江町二部1番地1で開院

社会福祉法人 恩賜財団済生会支部 福井県済生会病院

はじまりは 「診断の福井済生会」

恩賜財団済生会は明治天皇の「恵まない人々を施業救療(無償で治療すること)によって救いなさい」との「済生勅語」により明治44年に創設された財団であり、秋篠宮皇嗣殿下を総裁に全国40都道府県に81病院を含む388施設を有し職員5万9000人の日本最大の社会福祉法人です。

福井県済生会病院は昭和16年に開設され最初は下町のお助け病院でしたが、昭和52年に全国に先駆けて全身CTスキャンを導入、画像診断部を設置したことにより紹介患者が急増し平成5年には高速インターに近い現在の場所に新築移転しました。現在23科460床、医師140名看護師570名を含む職員1200名を有する地域の中核病院となっています。北陸初の地域医療支援病院に認定され、福井県肝疾患診療連携拠点病院、がん診療拠点病院、災害拠点病院、臨床研修指定病院であり、病院単独としては日本で唯一のアメリカ心臓協会(AHA)公認国際トレーニングセンター(ITC)を有します。

患者さんを支援する済生会

当院の医療の中心は400余名の登録医の先生方との「地域連携医療」、福井県初の緩和ケア病棟や日本海側で最初に導入したIMRT等による「患者に優しいがん医療」、これも日本海側初のSCU(脳卒中センター)や前述のAHA-ITC等の「急性期医療」、福井県の病院では最大規模でPETも有する健診センターでの「予防医療」です。

また、済生会の支援事業として生活困窮者の無料・低額診療に加え出所前後の受刑者の就労支援(これにより再犯率は半減しました)、アイバンクの運営、性暴力被害者救済センター「ふくいひなぎく」の運営などを行っています。最近は特ながん患者に対する支援を積極的に行っており「集学的がん診療センター」を開設「診療の個別相談」「がんレクチャー」「市民公開講座」による情報支援、「ピアサポートとしてのメディカル・カフェ」「がん哲学外来」などの精神支援に加え「就労支援」「家族支援」「がん教育」などの多角的な支援を行っています。これらの事業により厚労省研究班の「明日の架け橋大賞最優秀賞」をいただき、国立がん研究センターより「がん相談支援セン

ター」、厚労省より「がん患者の仕事と治療の両立支援モデル事業」に認定されました。

チーム医療の済生会

病院運営として当院が最も大切にしている事は、理念「患者さんの立場で考える」を実行する職員によるチーム医療であり、医療職に事務職も含めたチーム医療や、複数科の医師によるチーム医療、160種のクリティカルパスによる医療の標準化も推進しています。そのため労働環境にも配慮した事により、働きやすい病院「ホスピレート」認証、「第5回ワーク・ライフ・バランス大賞優秀賞」、「第1回カエルの星(内閣府)」「福井労働局働き方改革ベストプラクティス企業」認定等もいただき、「日本経営品質賞大規模部門」を日本の病院で唯一受賞しました。

当院の診療科の大部分は金沢大学の各医局からのご支援・ご指導を受けており、十全同窓会の皆さまのご尽力には深く感謝しております。これからも福井県における金沢大学の拠点として努力してまいりますので、更なるご支援をよろしくお願いいたします。

(院長 登谷 大修:記)

概要

社会福祉法人 恩賜財団済生会支部 福井県済生会病院	
所在地	福井県福井市和田中町舟橋7番地1
開設	昭和16年8月
病院長	登谷 大修
病床数	460床(一般421、地域包括39)
診療科数	23

沿革

昭和16年8月	恩賜財団済生会福井診療所として開設
昭和52年5月	北陸最初の全身CT設置
昭和57年4月	総合病院として承認
平成5年5月	新病院開院
平成16年3月	地域医療支援病院に指定

教室だより

血管分子生理学

研究の紹介

平成11年に多久和が教授に着任して以降、教室の主要な研究テーマは、血管生物学(血管トーン、血管新生、血管バリア機能や心臓血管の病態[動脈硬化、高血圧、心肥大])となりました。これらの研究課題について、私たちが当時新たに同定したスフィンゴ脂質メディエータースフィンゴシン-1-リン酸(S1P)の受容体(S1P₁~S1P₃)やその合成酵素スフィンゴシンキナーゼ(SphK)、ならびにこれまで機能がほとんど不明であったII型PI3-キナーゼの2つの分子群にフォーカスして研究を展開しています。

1. S1P受容体、S1P合成酵素の血管における役割

血管平滑筋からクロニング・同定した受容体S1P₂は、三量体Gタンパク質G_{12/13}と優位に共役し低分子Gタンパク質Rhoを強く活性化します。この結果、Racの抑制を介して細胞遊走を強力に抑制するユニークな受容体であることを見出しました。S1P₂のこのシグナリングは内皮においては血管新生抑制をきたし、平滑筋では血管収縮をきたします。また、内皮ではアナフィラキシーメディエーターであるPAFやヒスタミンによる内皮バリア機能破綻に拮抗することを見出しました。この分子機構は、内皮においてRhoによるイノシトールリン脂

質PIP₃の3-ホスファターゼPTENの促進を介したキナーゼAktの抑制、その結果と

してNO合成酵素eNOSの抑制によることを解明しました。SphKはメディエーターであるS1Pの産生酵素であるとともに、細胞内ではスフィンゴ脂質分解経路の必須酵素であり、リソソームなどの小器官膜におけるS1Pの前駆脂質セラミド、スフィンゴシンの蓄積を防ぎ、リソソーム機能を維持することによりオートファジーにも必要です。ノックアウト(KO)マウスの研究から、動脈硬化巣のマクロファージでは細胞内に取り込んだ酸化リポタンパク由来の脂質をリソソームで円滑に分解するためにSphKは必須であることを解明しました。

2. II型PI3-キナーゼの新機能

もともと血管平滑筋収縮においてミオシン軽鎖ホスファターゼの抑制因子RhoのCa²⁺による活性化に必要な分子として発見したII型PI3-キナーゼαサブタイプ(PI3K-C2α)は、その後の研究が予想外の展開を示しました。PI3K-C2αKOマウスでは、血管平滑筋よりもむしろ内皮の障害が顕著であり、胎生期の著しい血管新生障害を来しました。この機序として、血管新生因子であるVEGF、S1PやTGFβのシグナル伝達が障害されていました。内皮



ではこれらの血管新生因子が細胞表面の受容体に結合すると受容体エンドサイトーシスがPI3K-C2α依存的に誘導され、エンドソームに移行した受容体がシグナル伝達を行うことを見出しました。PI3K-C2αKOマウスでは受容体エンドサイトーシスが障害される結果、VEGF、S1PやTGFβによるRhoやRacの活性化、Smadリン酸化といったシグナリングが障害され、その結果血管新生に異常を来しました。細胞の種類によっては、PI3K-C2αとともにこれと構造の類似したクラスII PI3K-C2βもエンドサイトーシスに関与しており、PI3K-C2α、PI3K-C2βの平滑筋特異的な二重KOマウスでは子宮平滑筋でのRho活性化が障害され、分娩障害を呈しました。

おわりに

血管系を中心に、新規な機能調節分子を同定し、それらの作用機構の解明を行ってきました。また、これらの新規分子の心血管病態への関与の解明にも取り組み、臨床への橋渡しを心がけています。学部教育においても、各器官の働きを細胞・分子のレベルで理解する教育を重視しています。

(多久和 陽:記)

スタッフ

教授 多久和 陽
准教授 杉本 直俊
講師 吉岡 和晃
助教 安芸 翔
事務補佐員 広瀬知恵美
大学院生 1 名

研究分野の沿革

血管分子生理学研究分野は、2001年大学院部局化に伴い生理学第一講座から名称変更しました。本研究分野(講座)の開設は1923(大正12)年、初代教授上野一晴教授の金沢医科大学(当時)赴任に遡ります。1949(昭和24)年、第2代齋藤幸一郎教授が着任されました。その後1954(昭和29)年、第二生理学講座の新設に際してこれまでの生理学教室は第一生理学講座となり、以後は神経系以外の臓器機能の生理学教育を担当しています。1974(昭和49)年永坂鉄夫教授が第3代教授として就任しました。その後、1999年(平成11年)1月、多久和が4代目の教授として着任し現在に至ります。

循環器内科学

診療

北陸医療圏の最後の砦として、循環器疾患全般に対する高難度医療を提供し、常にレベルアップと新規医療開発を目標に、診療にあたっています。虚血性心疾患に対する心血管インターベンションや頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーションに加え、大動脈弁狭窄症に対する新しい低侵襲治療法として、経カテーテル大動脈弁置換術(TAVI)も導入され、安定した成績を得ています。同時に心臓血管外科、放射線部、MEからなる北陸ハートセンターカンファレンスを通じて、それぞれの分野から意見を出し合い、集学的治療を提供しています。

教育

金沢大学医学類、大学院博士課程はもちろんのこと、臨床研修医、内科専攻医までシームレスな教育・指導を心がけ、全人的医療が提供できる人材育成に努めています。また、臨床、研究ともに、常に「Research Mind」を持って成長できるように指導しています。さらに金沢大学

内科グループとして、新たな総合内科専門医制度のもと、その他内科系診療科との連携を図ることで、総合力ある循環器内科医を育成しています。

研究

循環器疾患群の原因と病態を包括的に解明し、多様化するライフスタイルにあわせた個別化医療の研究開発を進め、生活習慣病の制圧拠点の構築および再生医療を含む新たな医療開発を目指した基礎および臨床研究を推進しています。

遺伝学に基づく次世代型循環器疾患個別化医療実践に向けた研究

高頻度遺伝子多型(SNP)の重積による循環器疾患罹患リスクの評価(遺伝子リスクスコア)に関する研究を遂行してきた実績から、本邦における個別化医療の実践を目指すため、国内のゲノムデータベースを活用して、診療ガイドラインへの収載による一般化を目指しています。

分子生物学的検討に基づいた重症心不全患者の新規予後予測バイオマーカーの探索研究

個々の病態に合わせた、個別化した心不全の予防・治療法の開発を目的に研究を行っています。マウス心不全モデルを用いた検討から、心臓リモデリング制御メカニズム、心不全病態形成における臓器連関、ヘパトカインを介した心臓—

肝臓連関の解明に尽力しています。

自律神経活動と循環器疾患の関連

ヒトにおける筋交感神経活動(MSNA)の測定により、併存疾患と心不全の交感神経活動を介した悪循環および薬剤の影響を探索してきました。今後、新規のデバイス治療や新薬が交感神経活動に及ぼす影響を明らかにしていきます。

自己脂肪組織由来幹細胞(ADSC)の心臓ならびに血管再生療法の基礎・臨床研究

虚血性心不全や重症虚血肢に対して、ADSCを用いた「細胞治療」の安全性と有効性を確認する臨床研究を行っています。また、ADSCに含まれるCD271陽性幹細胞の含有率が低下すると血管新生効果が減少することを明らかにしました。さらにADSCの自律拍動心筋様細胞への分化誘導に成功し、その効率向上を目指した研究も行っています。

おわりに

平成31年4月より内科系研究分野再編に伴いナンバー内科から循環器内科へ統一されました。診療、教育、研究すべての面において、これまで以上教職員一丸となって精進していく所存です。十全同窓会の諸先生方におかれましては、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



スタッフ

教授 高村 雅之
准教授 川尻 剛照、藤野 陽(保健学科)、古庄 浩司(保健学科)
講師 坂田 憲治(医局長)、薄井 莊一郎(病棟医長)
助教 林 研至(検査部)、村井 久純(外来医長)、高島 伸一郎(救急部兼任)、多田 隼人(救急部兼任)、中西 千明、津田 豊暢、吉田 昌平、森 雅之
特任准教授 加藤 武史(システム代謝学)、
特任助教 森 三佳(検査部)、野村 章洋(先端医療開発センター)、下島 正也(救急部兼任)、岡田 寛史(救急部兼任)
技術補佐員4名、事務補佐員3名、大学院生12名

研究分野の沿革

2019年4月1日をもって、金沢大学医学系研究科および附属病院内科は従来のナンバー内科から臓器別体制へ再編が行われました。2019年1月1日付で高村雅之教授着任に合わせて、旧ナンバー内科の循環器グループが融和・融合し、新しい教室となりました。医薬保健学総合研究科の講座名は医学系研究科循環器内科学分野と変更となり、附属病院における名称も、循環器内科に統一され、診療、研究、教育の充実を目指して活動を開始しています。

支部だより

能登支部

令和元(2019)年度金沢大学医学部十全同窓会能登支部総会・懇親会は、令和元年5月19日(日)に十全同窓会会長中村信一先生をお招きし、和倉温泉ホテル海望で開催されました。晴天に恵まれ、14名の先生方がご参加くださいました。総会に先立ち、平成30年度物故会員4名：金田又衛先生(昭和33年卒業)、刀襦恒夫先生(昭和37年卒業)、宮下友吉先生(昭和28年卒業)、北村豊三郎先生(昭和17年専卒業)に黙祷を捧げました。

続いて議事に入り、事業報告、決算報告、会計監査報告と、次期支部長に公立能登総合病院吉村光弘先生(昭和56年卒業)が就任されることを満場一致で承認しました。

中村信一会長のご講演に先立ち、昨年から始めた新しい試みとして、支部の若

手会員によるミニ・レクチュア2題(1題15分)を今年も発表していただきました。公立能登総合病院口腔外科部長長谷剛志先生(平成17年度大学院修了)は「口腔機能と「食べる力」について～フレイル予防につながる咀嚼の意義とは～」と題して、またさはらファミリークリニック理事長・院長佐原博之先生(平成7年Ⅱ会員)は「医師会ってなんだ!？」と題して、それぞれユニークで奥の深い話題を提供してくださいました。中村信一会長は、金沢大学が高校生や学外者に金沢大学を紹介するために作成したDVDをお使いになり、さらにスライドによって附属病院の内科再編を初めとする学内の新しい動きを解説されました。いずれのご講演にも参加者から質問が相次ぎ、充実した総会になりました。

懇親会では最年長のご出席者である佐原吉博先生(昭和36年卒業)のご発声で乾杯し、明るく波静かな七尾湾の眺望を楽しみつつ、新鮮な海の幸(採れ採れの「鮑の酒蒸し」最高!)に舌鼓を打ちま

した。荒井邦夫先生はご長寿会員(満80歳)推薦、佐原吉博・博之先生は父子鷹^{おやこだか}のご参加で、出席者一同から祝福を受けました。楽しい歓談の時間は瞬間に過ぎ、中締めを村本信吾先生(昭和42年卒業)にお願いして明年の再開を約し散会しました。

今回の参加者は次の通りです。前列向かって左から、八野田実(昭和48年卒業)、荒井邦夫(昭和39年卒業)、山本健(昭和48年卒業、支部長)、中村信一(十全同窓会会長)、佐原吉博(昭和36年卒業)、村本信吾(昭和42年卒業)、吉村光弘(昭和56年卒業) 後列向かって左から、長谷剛志(平成17年度大学院修了)、淵崎宇一郎(平成4年卒業)、松原完也(平成元年度大学院修了)、上木修(昭和56年卒業)、鎌田徹(平成3年度大学院修了)、佐原博之(平成7年Ⅱ会員)、伊達岡要(平成20年卒業) 敬称略

(山本 健：記)



滋賀支部

新たな年号が令和になり最初の金沢大学医学部十全同窓会滋賀支部総会が、6月2日(日)草津市のクサツエストピアホテルで開催され、参加者は13名でした。まず、長年地域医療に貢献された故山崎時雄先生(友仁会会長、昭和28年卒業)のご冥福を祈り黙祷がささげられました。続いて、今年から支部長に就任された山本明先生(昭和46年卒業)より開会の挨拶があり、新支部長としての決意を述べられました。安田美代子先生(昭和49年卒業)より平成30年度の会計報告があり、会費未納者が多いことなどいろいろの問題点も指摘されました。続いて会員の移動等報告があり、特に滋賀医科大学心臓血管外科教授の浅井徹教授(昭和61年卒業)が順天堂大学心臓外科教授として移動されたことに関しては、滋賀県心臓外科の発展に多大の貢献をしていた

ただにだけに滋賀県支部としては非常に残念なことでした。今後益々のご発展を期待したいと思います。続いて山本支部長から滋賀県支部規約の改正案が説明され、会計年度を4月1日から翌年の3月31日に変更するなどの案が承認されました。また、会員数の減少や偏在などの理由により、地区割りに関して滋賀医大を含む大津地区、湖南地区、湖東・甲賀地区、彦根・湖北地区の4地区に編成し直すことに決まり、役員の変更も了承されました。

続いて、本部からご多忙の中を快く駆けつけていただいた金沢大学医学部消化器・腫瘍・再生外科学の太田哲生教授(昭和54年卒業)から金沢大学医学部および附属病院の近況報告の後、ご専門の「消化器外科領域における最近の話題」というタイトルでご講演を賜りました。昨年のノーベル賞受賞で話題となったがんの免疫療法について、その有効性と問題点について説明していただき、外科手術後の体力回復およびサルコペニアの予防に関して、健全な腸管フローラの維持・

強化が重要であることについて分かりやすく解説していただきました。写真撮影の後、元滋賀県医師会長の浅野定弘先生(昭和42年卒業)から乾杯の発声のあと懇親会に移りました。会員各自の近況報告をしていただきましたが、身体の動く間は第一線で研究や臨床をしたいという先生方が多く、勇気づけられました。一旦リタイアした後に再開業した話や、介護保険と医療保険とは全く違うことなど、興味深い話題も出るなど、お酒と料理に舌鼓を打ちながら会話も弾み、会の終了後もしばらく談笑が続いておりました。その他の参加者は、江竜喜史(昭和39年卒業)、白石制(昭和41年卒業)、朝日晋(昭和45年卒業)、眞下六郎(昭和46年卒業)、小野進(昭和47年卒業)、安田和宏(昭和48年卒業)、谷徹(昭和50年卒業)、山本尚(昭和56年卒業)、三浦克之(昭和63年卒業)の先生方および伊藤誠(昭和54年卒業)でした。来年の再会を約束して散会となりました。

(伊藤 誠：記)



支部だより

神奈川支部

令和元年6月30日(日)、神奈川支部総会が崎陽軒本店において開催されました。

十全同窓会 中村会長のご挨拶では、金沢大学の近況についてご説明があり、附属病院において内科系が臓器別に再編され、臨床や研究においてより良い連携が取れる体制になったと伺いました。腰痛を押してご来席いただきまして、大変申し訳なく恐縮いたしております。

2017年、当支部総会における中村会長のご講演で、「金沢大学ナノ生命科学研究所(NanoLSI)」が、我が国の「世界トップレベル研究拠点(WPI)」として採択され、招聘した世界の研究者と共に最先端の研究が進められている事を伺いました。この世界トップレベル研究の話をぜひお聴きしたいとNanoLSIをお願いをしたところ、幸運にも、担当理事の福森副学長よりご講演をいただけることになりました。

振動させたカンチレバーと試料の間に働く原子間相互作用による力を検出し、スキャンする事により生きた細胞のナノ単位の観察を可能にした、原子間力顕微鏡(Atomic Force Microscopy: AFM)、そして柔らかい細胞表面の観察も可能な走査型イオン電導顕微鏡(SICM)。この世界最先端の技術を基礎にして、ナノスケール・分子レベルでの生命科学の飛躍的な進展をもたらす「ナノプローブ生命科学」の創成を目指す。これが、2017年創設された「金沢大学WPIナノ生命科学研究所」であると伺いました。

日常臨床の場で光学顕微鏡の組織を見る時は数百倍、電子顕微鏡でも数万倍拡大の世界です。とても、ナノ・10億分の1の世界は想像もつきません。

高速AFM画像を見せていただきました。細菌外膜表層の「Porin」。これまでの研究でその

存在は散在する外膜の孔として認識され図示されていました。ところが、生きた細菌外膜表層を高速AFMで見ると、外膜は完全に直径7nm・深さ1nmの網目構造に被われており、さらに微解剖実験により「Porin3量体」が明らかにされました。まさに「百聞は一見に如かず」の光景でした。

また、ミオシン分子がアクチン繊維に沿って走行運動する様子を、世界初の高速AFM動画映像で見せていただきました。科学の進歩は、人間には見えない現象を際限なく可視化してきました。ナノレベル画像との遭遇に、会員一同に感動のどよめきが起こり、素晴らしいナノ探検をさせていただきました。

「ナノ生命科学研究所(NanoLSI)」における生命現象の解明は、さまざまな疾患の診断・治療の開発に繋がるとも重要な研究です。ますますの進展を祈念して止みません。

講演の後は、心地よいピアノの生演奏を聴きながら、昼食をいただき、久しぶりの語らいを楽しみました。また、前支部長・島先生のリーディングボーカルとピアノ伴奏のもと“金沢大学校歌”と“北の都”を熱唱して大変盛況でした。

十全同窓会神奈川支部の歴史について知りたく本部に資料をお願いしたところ、事務局山岸さんのご尽力により昭和25(1950)年創刊当初からの十全同窓会神奈川支部に関する貴重な記録をいただき

ました。開会の挨拶で、支部長を引き継ぎました若杉より、この歴史について少し話させていただきました。

金沢大学十全同窓会は、昭和7(1932)年に創設され、87年の歴史があります。戦時中休会、戦後、昭和25(1950)年に再開され、この時に十全同窓会会報1号が創刊されました。

昭和27(1952)年より「横浜支部会」村山支部長の記録があり、昭和31(1956)年に初めて「神奈川支部」の名が見られ、村山午朔先生によって横浜支部より発展的に神奈川支部が作られ、63年の歴史があるということが分かりました。

当初、会員数は45名でしたが、昭和36(1961)年60数名、昭和44(1969)年110数名、昭和49(1974)年130名と、年々増え、本年(2019)237名となっております。北陸三県に次いで会員の多い支部となります。

神奈川支部総会は、平成22(2010)年より、関東支部合同総会として、東京、神奈川、埼玉、千葉、茨城の1都4県で合同開催されるようになりました。しかし、神奈川支部会員より、神奈川支部総会再開の強い要望があり、平成28(2016)年より隔年開催という運びになりました。

今回、参加者27名のコンパクトな会でしたが、非常に素晴らしいご講演をお聞きして深く感銘を受けた神奈川支部総会でした。(若杉 春枝:記)



千葉支部

令和最初の十全同窓会千葉支部会総会が令和元年7月20日(土)に千葉市の丸万寿司で開催されました。今回は、平成30年5月1日付で順天堂大学医学部附属浦安病院消化器・一般外科の教授に就任された、石崎陽一先生(昭和60年卒業)の教授就任祝賀会を兼ねて行われました。前回平成最後の会では東邦大学医療センター佐倉病院乳腺外科教授の榊原雅裕先生(平成5年卒業)のお祝いを行ったばかりであり、千葉支部会で2期連続で教授就任のお祝いをしたのは、おそらくこれが初めての出来事ではなかったでしょうか。令和となって初めての支部会だったせいか、石崎先生のお人柄か、昨年の納涼会が台風接近に伴い中止となったせいか、いずれにしても例年の納涼会よりも大幅に多い、24名の先生方に参加していただきました。

支部長の千葉大学大学院医学研究院生殖医学講座主任教授の生水真紀夫先生(昭和56年卒業)のご挨拶により開会しました。今回は久しぶり?に幹事の石川(平成7年卒業)よりも若い先生方が数多く出席されました。生水先生から千葉で十全同窓会という、横のつながりがあることの大切さが語られた後、千葉支部会

の長老ともいべき能川浩二先生(昭和40年卒業)のご発声により乾杯が行われ、千葉の地酒と美味しい寿司懐石を堪能しながら、会員が親睦を深めました。

千葉支部会では毎回、参加者全員からスピーチをいただいております。今回も24人全員から一言ずつお話をいただきました。幹事が「お一人の持ち時間は2分です」とアナウンスしたものの、出席者全員が持ち時間を大幅にオーバーしてしまい、大変盛り上がりました。卒業年度、診療科、勤務している施設が全く違う者同士が集まって、昔話あり、趣味の話あり、自慢の息子さんの話あり、監修しているテレビドラマの報告あり、大学時代のクラブ活動や寮生活の話ありと、常に笑いの絶えないスピーチとなりました。

続いて、石崎先生の教授就任のお祝いとして、会長の生水先生から記念の花束と記念品の贈呈が行われた後、石崎先生からスピーチがありました。石崎先生のご専門は肝臓移植であり、これまで多くの肝移植を手掛けられてきたとのことでした。新しく赴任された順天堂大学附属浦安病院では、10時間以上の長時間手術に入っていらっしゃるとのことでした。今回は石崎先生と卒業年度が同じ昭和60年卒業の先生方が多く参加されており、本来の同窓会としても盛り上がっていらっしゃいました。

最後に新井公人先生(昭和55年卒業)から締めのご挨拶があり、参加者全員で

記念撮影を行い、盛会のうちに会が閉じられました。この会は同年卒業の人たちが集まる、いわゆる同窓会とは異なり、これまで全く会ったことのない先生方とも「金沢大学卒業」という共通点で、初対面で気軽に年齢の幅を超えて話ができる会です。ただ、最近参加者の高齢化が進んでおり、いまだに昭和卒業の先生方が平成卒業の先生方を上回っております。千葉県在住の若い先生方も気軽に参加していただければ幸いに思います。

出席者(敬称略、卒業年)：能川浩二(昭和40年卒業)、新井公人(昭和55年卒業)、滝澤剛則(昭和55年卒業)、生水真紀夫(昭和56年卒業)、加藤博敏(昭和59年卒業)、石崎陽一(昭和60年卒業)、尾崎茂(昭和60年卒業)、高橋敬一(昭和60年卒業)、寺田一志(昭和60年卒業)、成山昌夫(昭和60年卒業)、相生真吾(昭和62年卒業)、上原貴博(昭和62年卒業)、松本尚(昭和62年卒業)、石井源一郎(平成2年卒業)、古川勝規(平成2年卒業)、諸岡智行(平成6年卒業)、石川博士(平成7年卒業)、橋本佐(平成12年卒業)、駒崎義利(平成13年卒業)、安松比呂志(平成17年卒業)、田中教久(平成19年卒業)、羽生裕二(平成20年卒業)、秋山文秀(平成23年卒業)、黒田紘典(平成28年卒業)

(石川 博士：記)



生水支部会長(中央)、石崎先生(右)、能川先生(左)



参加者の集合写真

支 部 だ よ り

関東地区拡大支部

平成24年から定例会場となっている明治記念館において、本年も十全同窓会関東地区拡大支部合同総会が、8月3日(土)に開催されたので、報告する。関東地区拡大支部総会は、会員の住所と勤務先が異なり隣県になることも多いため、神奈川、千葉、埼玉、茨城、そして東京を一括して開催しようという目的で始まった。

本年は梅雨明けが遅れ雨量が多く気温は低めで作物は大丈夫かと気を揉んでいたのが8月近くになると一転して、関東は入道雲と青い空の猛暑となり、連日熱中症による救急搬送数がうなぎのぼりとなった。

さて、本年の同会は、明治記念館において、金沢から十全同窓会会長中村信一先生をお招きして、8月3日(第1土曜日)の午後5時から開催された。本年は47名の会員が参加した。

ここで、本会世話人会のメンバーを記載しておく。神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、そして東京の各支部長ないし副支部長と幹事からなる。神奈川県支部長は若杉内科クリニック若杉春枝先生、埼玉県支部長久慈一英先生、千葉県支部長水真樹夫先生、茨城県支部長諸岡信裕先生(茨城県医師会会長)、東京都支部長

は内潟安子である。幹事は平松慶博先生、田上恵先生、井田雅祥先生である。

茨城県支部長諸岡先生に開会の挨拶、神奈川支部長若杉先生に乾杯のご発声をいただいた。

中村信一十全同窓会会長の「金沢大学医学部の近況」に関する報告は、国立6大学間の包括連携協定以後順調に、国際連携から研究交流、留学生獲得まで幅広く連携が進んでいることから始まり、がん研究に威力を発揮している金沢大学ナノ生命研究所の紹介、本年の国家試験合格率、卒業後の進路のこと、十全同窓会総会の新役員のこと、大学運営体制、第三期中期計画目標のこと特に世界最高水準の教育研究拠点型の大学の機能強化、研究域の主な出来事や、金沢大学で推進されている国家的事業、スーパー予防医学に関する3大学共同大学院の設置、WHOコラボレーティングセンターのこと、超然プロジェクト、先魁プロジェクト、そして、宝町キャンパスのこと、外国人留学生がどんどん増加していることなどが紹介された。近未来の金沢大学医学部にわくわくした大きな目標があることが全員に伝わったと思う。

中村信一会長の近況報告の後には、本年は、昭和48年卒の茨城県支部長諸岡信裕先生にご講演をお願いした。タイトルは、「私の地域医療と鉄道人生」。先生は、千葉大学医学部第3内科に入局し循環器内科を専攻し、平成5年から茨城県小川南病院病院長、現在は2期目の茨城



小川南病院にて保存中のキハ432

県医師会会長という重責と茨城県公安委員会委員長の重責を担っておられる。その傍ら、鉄道との深い関わりをお持ちになり、幼少児から現在に至るまでの鉄道人生を語っていただいた。先生の長い長い鉄ちゃん人生。しかし近年になってから、住民の足であった鹿島鉄道が廃線になっていくのに遭遇しての鉄道愛にあふれた地域運動は涙を誘うであろう。現在、病院の敷地内に鹿鉄の電車の車両を1台置いておられる。ちなみにこの車両は富山県加越能鉄道から鹿島鉄道に移譲されたものだ。

懇親会では、全員から近況をご報告いただいた。本年は、東京都支部副支部長三浦順之助先生によるバイオリンソロを堪能した。懇親会には金沢から飛び入り参加して下さった金沢大学血管分子生物学教授山本靖彦先生にも、会を盛り上げていただいた。

なお、来年の本会は2020年東京オリンピック時期と離して、8月第5土曜日29日、同じく明治記念館で、午後5時から開催と、6月の世話人会で決まった。ぜひ、多くの会員に、参集をお願いしたい。

(内潟 安子:記)



ボストン支部

去る8月17日に、ブルックラインの日本料理店「四季」にて金沢大学十全同窓会ボストン支部会を開催いたしました。幸いにも今回、下記の会員全員が参加することができました。

ハーバード大学眼科教授広瀬竜夫先生、寺本了太先生(ブリガム アンドウィメンズ病院)、中河秀俊先生(ダナ・ファーマーがん研究所)、井川寛章先生(ジョス

リン糖尿病センター)、原島愛先生(ジョスリン糖尿病センター)、Dong Han先生(マサチューセッツ大学)、耒田善彦先生(マサチューセッツ総合病院)、南太一朗先生(ブリガム アンドウィメンズ病院)、Haruka Badger(ブリガム アンドウィメンズ病院)の9名です。寺本先生が幹事を務めてくださいました。美味しい和食を楽しみながら、近況報告やボストン生活の情報交換など、和やかなひとときを過ごしました。

今回新たに、お二人の先生にご参加いただきました。会員が増え、賑やかになるのは喜ばしい限りです。南太一朗先生

は東北大学を2010年に卒業され、金沢大学腎臓内科に入局され、この6月よりブリガム アンドウィメンズ病院の腎臓内科に研究留学されています。耒田善彦先生は金沢大学を2005年に卒業され、沖縄で腎臓内科の臨床医としてご勤務の後、2018年よりマサチューセッツ総合病院で機械学習の医療への応用、疫学などをテーマに研究されています。



また今回は、支部会長を広瀬先生から私Badgerが引き継ぐこととなり、そのご報告もさせていただきました。広瀬先生には長年に渡りボストン支部の会員の支援をしていただき、深く感謝しております。今回も、研究生活に大切な点などをご自身の経験からアドバイスしてください、私たちにとって大変勉強、そして励みになりました。先生には今後も引き続き、ご指導を賜りたいと思います。

(Haruka Badger : 記)



クラス会

卒後55周年三九会

卒後55周年を迎え、令和の時代となった5月25日(土)ホテル日航金沢でクラス会が開催されました。金沢で開催されたのは北陸新幹線が金沢駅まで延伸されてから初めてのことでした。出席者は存命会員60名中32名、同伴者9名で、合計41名でした。5年前のクラス会と比べて7名の減となりました。

開宴にあたり、昨年5月14日に物故された井上雄元君、今年4月25日に逝去された長井征夫君に黙祷を捧げました。

馬淵宏君の開会の挨拶に続いて、岡本宏君の乾杯があり、皆が80歳を超えて再会を果たしたことを喜びあいました。間もなく、日本の名歌「さくら さくら」と「荒城の月」の記念演奏がありまし

た。稲坂由美夫人のお箏と米倉幸人君のサキソホンそして藤村の歌で演奏しました。

お酒もまわってくつろいだ頃、各自2分間以内のスピーチが始まりました。すでに概ね現役を退いた方、いまだ情熱をもって続けている方、子息が帰ってきて交代する方等、人生はいろいろでした。最近、重い感染症のために昏睡の状態となって生死の間をさまよい、6カ月ずつの入院とリハビリを経て奇跡的に回復したお話もあり、一同感動し皆で回復の歓びを分かちあいました。

米倉君のサキソホン演奏を聞きながら歓談が続き、気持ちは医学生だったころに戻りました。次回は富山県が開催を引

き受けることとなり、代表して野垣俊幸君の挨拶がありました。9時頃、三輪晃一君の締めの挨拶で散会しました。

参加者は以下の通りです。

安積宏明夫妻、荒井邦夫、有川功夫妻、稲坂暢夫妻、岩泉九二夫、岩佐嘉郎夫妻、岡本宏、北野倫子、加納勝利、黒崎正夫、小林宜泰、小山素麿、紺谷昭哉、近藤俊彦、斉藤大直、桜井登、松田尚武、武内徹、川上義孝、野垣俊幸、福島克治、藤村和昌夫妻、堀川利彦夫妻、馬淵宏、三嶋勉夫妻、宮城徹三郎、三輪晃一、矢吹朗彦、山田芳明、山本達夫妻、米倉幸人、渡辺国重夫妻。

(藤村 和昌：記)



同窓生の消息

第44回日本外科系連合学会学術集会 開催報告

金沢医科大学一般・消化器外科学主任教授

小坂 健夫

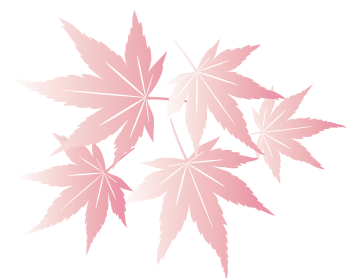
(昭和60年度大学院修了)

令和元年6月19日(水)～21日(金)の3日間、ホテル金沢、ANAクラウンプラザホテル金沢において、第44回日本外科系連合学会学術集会を開催いたしました。本会は「外科系諸科・職種の連合・連携」、「若手外科医の育成・支援」および「Fellow会員の認証(FJCS、Fellow of Japanese College of Surgeons)」をミッションとする学術組織です。当地での開催は1982年の金沢大学宮崎逸夫教授と、2006年の本学高島茂樹教授以来3回目となります。

メインテーマを『外科をいかす』として、40を越す主題セッションが組まれ、日本を代表するトップランナーが講演を担当し、討議がされました。特別講演では、国立がん研究センター土原一哉先生の「がんゲノム医療の現状と展望」、PMDA石井健介先生の「単回使用医療機器(SUD)の再製造(R-SUD)にかかる規制導入」、および国立長寿医療研究センター荒井秀典先生の「外科治療におけるサルコペニア・フレイルの意義を考える」が講演されました。

若手育成として研修医および専修医セッションを設け、5件の優秀演題賞を選出しました。懇親会ではさらに、施設別チーム対抗の「鏡視外科技術を競う Surgical Battle SASUKE」が開催され、大いに盛り上がりました。

学会期間中の金沢は晴天に恵まれ、全国から800名余が参加し、診療科間あるいは職種間で、熱心な討議がされ新鮮でした。本会の開催にあたり、多大なご支援をいただいた関係者に、心から感謝を申し上げます。



金 沢 か ら 世 界 へ 発 信

医療における 人工知能の将来性

先進予防医学研究科機能画像人工知能学
中嶋 憲一
(昭和54年卒業)

はじめに

将棋や囲碁の世界で人工知能(AI)が勝利したというニュースを聞いたのは数年前であったが、AIロボット、車の自動運転や社会現象の解析への応用も進み、AIはどこまで人間に近づくのか、超えるのか、あるいは問題はないのかという議論が真剣になされるようになった。医療の中でもビッグデータを学習したAIを利用して特定の診断や治療に至ったという話題も出始めており、医療関係者もAIを避けては通れない時代に入った。筆者らもAIを利用した研究を行い臨床への適用を始めているのでその一部を紹介する。

診断の多変量モデルから 人工知能モデルへ

医師が患者をみて診断する過程では、さまざまな情報を何らかのアルゴリズムで統合してなされている(これは経験と呼ばれるかもしれないが)。しかしながら、診断上の最終的判断は常に多変量に基づいてなされており、従来用いられてきたのが統計的手法による多変量モデルである。例えば、私たちが携わってきた心筋血流SPECTを用いた心事故予測モデルがあるが、年齢、心機能、合併症、心筋血流検査の血流欠損等から、3年間の重症心事故率を推定する(Circ J, 2012)。また、心不全ではその重症度に年齢、性別、左室機能、心筋交感神経画像を加えて、短期および長期の心臓死の確率を算出できるモデルも作成し、その推定値の妥当性も確認された(Eur Heart J Imaging 2016, 2018 ; J Nucl

Cardiol, 2018)。また、心不全患者が不整脈死や突然死する確率も計算できる可能性があり、現在その初期AIモデルを作成中である。

人工知能の処理と結果

多変量のデータから何らかの結果を導き出す過程は、大きな行列計算をひたすら行って最適解にいたる計算経路を導き出すことに相当する。いわば人間が経験や直感に頼って判断する無意識の過程を、膨大な数学的計算によって最適のアルゴリズムを見つけることになる。その結果の多くが疾患や予後を示す確率として表現されるので、もし年間の死亡率が0.5%と推定されれば経過観察や薬剤治療、それが10%であれば高リスクであり、より積極的で高価でもある治療戦略に結びつけるというような意思決定に利用できる可能性がある。

画像と医療情報の解析

医用画像においても機械学習/深層学習のパターン認識の能力は有望である。画像を認識する際には、診断医は訓練によって正常像、異常部位、形、大きさ、個数、内部構造、経過などを統合して診断する。このような過程もAIによって実現できる可能性がある。骨シンチグラフィから骨転移か否かを判定してその総

転移量(%)を算出するAIソフトウェアは、現在前立腺癌等の転移評価に用いられている(EJNMML Res, 2013)。また、心筋血流イメージングから血流欠損や虚血を診断するAIソフトウェアも開発しており、異常の有無に関しては画像診断の専門医に匹敵するような精度を出すに至っている(EJNMML, 2017)。現在、交感神経画像や脳の受容体画像を基に心臓病や認知症をAI診断する方法も検討を始めている。

さらには患者の臨床情報を総合して判断するアルゴリズムも原理的には可能である。将来的にさまざまな医療情報がビッグデータとして容易にデジタル出力できるようになれば、あとはコンピュータがその大量のデータを蓄積解析して推奨を示すということも夢物語ではない。

おわりに

AIの利用にはさまざまな肯定論と否定論があるが、その利用は確実に医療の中にも広がる。そのような変化の中でも最終的判断は医師と患者自身であることはいままでもなく、私たちはいかにそのAIを上手にツールとして利用するかが問われる。現状でもAIは優れたセカンドオピニオンを提供するようになっており、医師にもこのような新技術を含めた総合力が求められる時代は目前にあるのかもしれない。



医学展 2019

日時／令和元年10月26日(土)・27日(日)

場所／医学類キャンパス

今年度の医学展代表を務めます、安田力です。医学展を実行するにあたっての自身の変化、心情を少しばかり書かせていただきます。医学展実行委員長となり半年ほど経ちますが、つくづく、とても荷が重い役目を請け負ってしまったものだと思う日々です。と同時に、自身の将来について、これから医師として働くことについてよく考えるようになりました。それは私にとって予期せぬ、しかし、とても喜ばしい変化でした。これから医師になる私たち医学生に、社会は何を求めているのか、どのようなことを期待しているのか考えました。答えは見つかりませんが、医学展に関わることがこのような視点で考えるきっかけとなったことに違いはなく、少なくとも私自身にとってはとても意義深いことと感じています。

さて、この十全同窓会会報の記事のように医学展実行委員長には、意見や考えを求められる機会があります。誠に光栄な限りです。これまで学生として、学ぶ、教わる立場だった者が、学年が進むにつれ、伝える、教える立場に変わっていくのです。学ぶことより、その学んだことや考えたことを伝える方がずっと難しく、身を引き締め精進しなければと痛感しています。

では、私なりに考える「医学展とは」を紹介させていただきます。

医学展とは、これまで学んできた医学を地域の人々に発信していく場だと思えます。どうすれば来場者の方に喜んでいただけるか、医薬保健学域の学生としてできることは何か。思うにそれは、日ごろ講義を受け、勉強するときに常々感じ

る、生命の美しさ、生きることの素晴らしさを分かりやすく伝えることではないかと考えました。特に今年の医学展では、生きる素晴らしさを少しでも来場者の方に感じていただければという思いから、スローガンを「力ーチカラー」としました。来られた人に生きるエネルギー＝力を与えられるような、そして参加する学生がみなぎる力を発揮できる医学展を目指す、という思いが込められています。

最後に、同窓会の皆さま方には、多大なご支援ご協力を賜り、今年度も医学展の開催が実現しました。実行委員一同、厚くお礼申し上げます。今年度は10月26日、27日の2日間の開催です。さまざまな素晴らしい企画、イベントを揃え



ています。詳細は「医学展 2019」ホームページをご覧ください。ぜひ皆さまお誘いあわせの上、令和元年度医学展へのご来場を心からお待ちしております。皆さまとお会いできることを楽しみにしております。

(金沢大学医学展2019実行委員長

安田 力：記)

10.26 ☺

10.27 ☺

2019年10月26日(土) 10:00~17:00
10月27日(日) 10:00~17:00

場所＝金沢大学宝町キャンパス
住所＝金沢市宝町13-1

※©2019 igakuten ■ igakuten.chikara.2019 HP: <http://igakuten.com/2019/> 澤芳南先生特別公開事務センターは医学展 HP から

Juzen FORUM HISTORICUM 十全歴史ひろば[8]

金沢医学館1期生の 集合写真は どこで撮影されたか —新史料による考察—

編集委員

山本 健

(昭和48年卒業)

はじめに

金沢市医師会に保存されている「金沢医学館1期生9名の集合写真(以下集合写真)」は、金沢大学医学部創立百五十周年記念モニュメント「医の源流 未来への継承」のモチーフである。集合写真原本の所在や撮影された写真館の名前・場所については長い間不明であったが、近年の調査研究によってそれらが次第に明らかになって来た¹⁾。今回、写真館が存在したと考えられる観音町の古老 松本雅夫氏から手書きの古地図が提供され、写真館の立地場所をほぼ特定するに至ったので報告する。

従来の調査によって 明らかになった事項

1. 集合写真の原本は、金沢大学名誉教授板垣英治氏によって、金沢市近世史料館所蔵の藤本文庫に保管されていることが見いだされた(2013)。
2. 集合写真原本の裏には、「石川縣金澤観音町入口 吉田寫之(吉田之を写す)」と書かれた小豆色の小さなラベル(縦2.4×横1.6cm)が貼られている。これによって、集合写真の撮影場所は明治4年頃から金沢観音町で写真館を

営んでいた吉田好二(本名吉田好之助 藤原芳貞)写真館と特定できた。

3. 吉田好二写真館の所在地については、明治4年頃金沢観音町に写真撮影所を開き、その後兼六園坂下に転じ、さらに明治24年浅野川大橋の北詰めから川沿いやや川上^{お かつま}の御歩町に転じ、明治30年頃²⁾あるいは大正末まで¹⁾営業していたことが知られている。ここで注意を要するのは、初代吉田好二は明治17年に長男文次郎に吉田好二の名を譲り、それ以後自らは「吉田三好」と名乗ったことである²⁾。明治6年³⁾あるいは7年⁴⁾に集合写真が撮影された初代吉田好二写真館は観音町入口の初代吉田好二写真館であり、写真館の絵図⁵⁾や外観写真⁶⁾が残っている御歩町の二代目吉田好二写真館ではない。
4. 初代吉田好二写真館の所在地が「観音町入口」であったことは集合写真の裏に貼られたラベルから明らかである。「観音町」の範囲を古地図によって調べたところ、明治初年ならびに明治25年の金沢市街図⁷⁾によって、現在の観音町入口北側(観音院に向かって左側)は、木町1番丁、木町2番丁であることが判明した。つまり明治初期に「観音町入口」と云えば、観音町入口南側(観音院に向かって右側)、現在の浅野川大橋交番～福嶋三枝店のきわめて狭い区画を指すと考えられ、初代吉田好二写真館はこの区画に存在したものと推定した¹⁾。

新史料の出現

筆者は旧御歩町2番丁で育ち、自宅からほど近い観音町の長田理容所が行きつけであった。以前から初代吉田好二写真館の情報収集を長田理容所長田實氏に依頼していたところ、2019年8月に至っ

て「観音町の生き字引」松本雅夫氏から観音町の住人変遷を示す手書きの地図が提供された(図1)。「吉田写真(館)」の具体的な名称が記された地図は、筆者の知る限りこれが唯一のものである。

この地図を調べると、図1斜線の地所(①)には、現在浅野川大橋交番が建っており、「吉田写真(館)」はその東隣に存在したことが判る。さらに図1③の「吉田写真(館)」の住居表示は旧御歩町1番丁1であり、明治24年に御歩町へ移転して営業を始めた二代目吉田好二写真館を指すことが確実である。

問題の「観音町入口」に建っていた初代吉田好二写真館は、図1の②に「江尻」と記されている地所に建っていたと考えるのが自然であろう。御歩町1番丁と観音町は背中合わせの地所であり、吉田三好・好二親子は兼六園坂下から御歩町に転ずる明治24年に、初代吉田好二写真館が建っていた場所と背中合わせの地所を入手して二代目吉田写真館を建てたものと考えられる。ちなみに、江尻宅は同地所に現存しており、二代目吉田好二写真館跡地(③)には現在「寿司処たかしま」が建っている。

昔この地図を画いて松本雅夫氏に託された先達のお名前や地図の作成時期は残念ながら不詳だが、地図に画かれているマンション(図1には表示していない)の完成年と交番の移転年から、地図の作成時期は平成3(1991)～平成13(2001)年の間と考えられる。

まとめ

新史料の出現によって、観音町入口(観音町1丁目1-4)に存在した初代吉田好二写真館と、御歩町1番丁1に存在した二代目吉田好二写真館の所在地が特定された。

十全昔話

四高の面影

大浦 孝

(昭和46年卒業)

その昔、金沢に第四高等学校があったということを知っている人は最近では少なくなった。地元、金沢市民は「四高の学生さん」と呼んで寛大にもてなしていたという。小生がよもや南国沖縄から雪国、北陸の地へ「留学」するとは夢にも思わなかった。都合12年も住んでしまっていた。最近、四高生の末裔として金沢の思い出を何か書き残しておきたい衝動にかられた。今となっては50年前の昔話であり、記憶も定かではない。忘却は精神衛生上好ましいことではある。追憶は熟年の徴候かも知れない。あの重くのしかかる様な、北陸特有の鉛色の空の中へ消え入りそうな記憶をたぐり寄せる作業を試みたい。

沿革史によると、四高は明治20(1887)年、第四高等中学校として創立され、明治27(1894)年、第四高等学校と改称された。大正4(1915)年には、寮歌「北の都」が生まれている。戦後の昭和25(1950)年には、四高閉学となっている。

金沢は古風な北陸の城下町である。中野重治の小説「歌のわかれ」の冒頭には、次のように書かれている。「金沢という町は片口安吉に取って一種不可思議な町だった。犀川と浅野川という二つの川がほとんど並行に流れていて、ふたつの川の両方の外側にそれぞれ丘があり、ふたつの川の間にもう一つの丘があり、町全体は、ふたつの川と三つの丘とに跨がってぼんやりと眠っている態であった。そうして、町の東西南北に沢山のお寺がたまっていて、町の名にも寺町とか古寺町とかいうのがあった。町の中央に名高い兼六公園という公園があり、(中略)つまりこの公園は川に挟まれた丘陵に拠っているのであった」

短い文章のなかに、ほぼ金沢の地勢を描写している。

戦災を受けなかった金沢には、城下町特有の武家屋敷や、そこにめぐらされた土堀が、昔のままに、古風な趣を添えていたところに残っている。近代化された街並は表通りだけで、一步裏通りへ入ると、用水が流れ、入り組んだ複雑な路地に古い門構えの家や、藁葺きの壁のほげ落ちた土堀が並んでいて、一瞬、別世界へ来たような錯覚に襲われることがある。

土堀の内側には庭があり、池があり、琵琶や、柚子や、棗や、銀杏などの暗い繁りのかげに、北国の深い底の家構えがある。

室生犀星は詩集『抒情小曲集』で歌っている。

うつくしき川は流れたり
そのほとりに我は住みぬ

春は春、なつはなつの
花つける堤に座りて
こまやけき本のなさけと愛とを知りぬ

いまもその川ながれ
美しき微風とともに
蒼き波たたへたり (犀川)

この犀川は、平素は水量も少なく鮎やうぐいが素早く川底の石のかげを泳ぐのが見えるほど、美しい流水であった。6月になると鮎を釣る人々の姿が、また冬になると、冷めたい水に加賀友禅を晒す風景が、橋の上から眺められた。

四高閉学から15年後、東京オリンピックの翌年、昭和40(1965)年、私は新制金沢大学へ入学した。詩情豊かな金沢で、全くかけはなれた別世界の学生

生活を送ることとなった。学生寮(泉学寮)に入り、そこで教養部の2年間を寮生活で送り、同級生も数名いた。そこは西の廊に近く、ある大先輩は廊から登校していたという伝説もあった。その頃、寮は古い木造建築が鉄筋コンクリートへ新築され、畳の大部屋は2人相部屋の洋間のアパートとなっていた。それでも24時間、騒々しく忍耐が必要であった。また非常に野放図で、部屋の掃除などしたことがなく万年床であった。コーヒークップが灰皿となり、必要な時簡単にすすいで、またコーヒークップに使ったりしていた。その当時は合理的で不自然な感じもなく、ごく普通の生活と思っていた。寮の食費は、朝10円、夕80円、計90円でまかなわれていた。全くの粗食で、朝のみそ汁など、ひどい時はもやしや2、3本浮いているだけであった。その頃、学食では素うどんが40円、定食のゴールデンランチが150円であった。今でも手元にある角川国語辞典の定価は、450円となっている。

寮生の中にはほとんど学校へ行かない者もいたが、真面目に朝早く出校する者は少なく、10時以降、午後から出校するものが大多数であった。(留年、休学、司法試験受験生等)

学校では風変わりな講義があった。病理の石川太刀雄丸教授が赤いちゃんちゃんこならぬ黒いちゃんちゃんこを着込んで現れた。今日は寒いし、出席者も少ないので、炉端談義でもしようかと言われてストーブの横に座り込んでしまった。ストーブに手をあて、木炭をくべながら実験腎炎の馬杉腎炎の解釈をされた。講義内容ではウサギが先だったのか、アヒルが先だったのか、もはや記憶はおぼつ

かない。そこは木造の階段教室で、教壇の中央にはストーブがあり木炭が燃えさかっていた。外は大雪で、時折窓から雪が舞い込む様な情景であった。文字どおり心暖まる炉端談義のユニークな講義であった。

倶楽部は入学当初、全学の水泳部に入った。広坂通りに面して、赤レンガの理学部の校舎がポツンと残っていたし、殺風景ながら四高の屋外プールもまだ残っていて、そこでの練習は厳しいものがあつた。新人は肝試しとして、15メートルほどの高さから飛び込みをさせられた。黄色い銀杏の枯れ葉が浮いているプールで泳いだ記憶があるし、小雪舞い散る中で、泳いだ記憶も残っている。オリンピック選手の山中毅が練習にはげんだという由緒あるプールであった。しかし、自分には寮生活からくる栄養失調もあり、体力が続かず、全学の猛練習と寒さに懲りて落伍してしまった。

学部に進んでは室内競技を選んだ。医学部の卓球部へ所属することとなった。後の大作家、井上靖が柔道の練習に明け暮れた「無声堂」と同形の建物が残っていた。門構えのついた黒瓦の木造建築で、当時は講堂と称していた。体育館でもあり、畳を敷いて柔道の練習あり、ネットを張ってバレーボールの練習あり、我々は卓球台を出して練習にはげんだ。相棒が来るのを待って、一人で壁に向かって球を打ち込んだり、相棒とはラリーを楽しんだりした。外では雪が降り積もっていた。

四大学と西医体(西日本医科大学体育大会)が毎年の目標であった。西医体の個人戦で優勝した猛者もいた。四大学は金沢、新潟、千葉、信州の対抗戦であり、当番で主催した。主催校は交歓会で余興

を準備するのが慣例であった。その年の出し物は寸劇「熱海の海岸散歩する貫一、お宮」であった。これも当番で私と相棒が演じることとなり、何故か私が貫一で相棒がお宮となり、貫一がお宮の衣装を調達するのがこれも慣例であった。貫一は地でいける分、ハンディとしてお宮の衣装を都合するのである。お宮の衣装をどこそで借りてくることも先輩からの言い伝えで決まっていた。どこでもよい! 東の廊お茶屋であった。

どこでもよい、武蔵ヶ辻の裏通りのお茶屋へ出かけ、ガラガラと格子戸をあけた。女中とおぼしき者が取り次いでくれ、女将とおぼしき人が出てきた。「金大の学生で、今度これこれしかじかで……」「ようござんすよ」とか言って奥へ入りすぐ出てきた。何も聞かず、平坦な正方形の紙箱を持たせてくれた。当日、貫一、お宮がうまくいったかどうかは記憶に定かではない。

翌日、武蔵ヶ辻のバス停を降り、紙箱を脇にかかえてお茶屋へ急いだ。バスを降りた拍子に紙箱から深紅の腰巻きがずれおち、純白の雪道へ長くたれさがっていた。あわててたぐり寄せ、箱に納めたのだが、自分の顔まで真っ赤になっていた。並んでバスを待つ乗客の表情までは全く記憶にない。今でも時々、あの深紅の腰巻きが汚れなかったかどうか気になるだけである。

今となっては古き良き時代の2、3のエピソードを紹介して、寛大な学生の町、金沢に敬愛の念をささげたい。

太郎 眠らせよ、太郎の屋根に雪降りつむ。

次郎 眠らせよ、次郎の屋根に雪降りつむ。

(三好 達治)

学生コーナー

医学類の勉強生活について

医学類 4 年
吉田健太郎

十全同窓会の皆さま、はじめまして。医学類4年の吉田健太郎と申します。僕は今年の4年の学年代表(テスト日程調整係)をさせていただいておりまして、今回この学生コーナーへの寄稿のお話をいただきました。今回は医学生生活についてお話しさせていただこうと思いますが、よく使われるタイトルなのですが、諸先輩方とは少し趣向を変えて勉強以外の面にも簡単に触れてみようかと思います。会員の皆さまに最近の医学生生活を少しでも知っていただければ幸いです。

ご存知の通り、大学の数ある学部の中でも、医学部の他学部に比べた勉強面での忙しさは群を抜いています。ですが、1年の中で見れば意外と時間の捻出はできたりします。その作った時間をどう使うかは人それぞれであり、そこに医学生の多様性が生まれます。

例えば僕自身の話をさせていただくと、医学部ゴルフ部(5月まで主将もさせていただきました、まだまだ部員募集中ですので2年生以上でもぜひ遊びに来てください!)でゴルフ、バスケットボールサークル3つを兼サーし、3年になってからは竹系会という全学のサークルで尺八の演奏もしております。加えてアルバイトも現在2つしております。数は多いですが、一つ一つの負担は軽いため意外と両立できます。

まず医学系の部活についてご説明します。体感9割近くの医学生は医学部〇〇部と名の付く部活に所属し、その競技になけなしの6年間をささげながら生活します。部活によってカラーはまちまちですが、勉強が大変な医学部では時間的・金銭的負担は軽い方が喜ばれます。どのようなカラーになるかは各部活の伝統と現



役部員の考え方によるところが大きいのです。僕の所属したゴルフ部であれば、代々「勉強をしっかりする、成績優秀な人が多い部活」という雰囲気でしたが、近年は部員が急増しその空気も変わりつつあります。個人的には、今の1~2年の若い世代が自然体でいられる形を自分たち自身で見つけてくれることを願っています。

他にも、主に角間キャンパスには医学部〇〇部以外にも多くの学生団体があります。そこでは医学部〇〇部にはない実にさまざまなアクティビティがあります。高校時代からバスケを遊びで個人的にしていたので、大学ではよくバスケットボールサークルに顔を出しています。3年になって尺八を吹き始めました。無事5年になれば、昔かじったピアノかテニス、法律の勉強、料理や武道にも時間を使いたいです。これらに対応できる多様なサークルがあるのが角間キャンパスのいいところだと思います。

大多数の医学生はアルバイトもしています。僕自身も接客業や塾講師、家庭教師など、塾産業をメインにいろいろしてきました。アルバイトの魅力は“コミュニケーションなど、医師免許を取るために特には重要ではないが、取ってから必要不可欠なもの”を得られることにあると思います。

こうして書いてみると、勉強以外にも意外といろいろできることが分かってい

ただけるかと思います。それでも、一番ウェイトの大きい時間の使いどころはやはり勉強です。他学部に比べ圧倒的に難しい試験と、それを一つでも落としたら即留年のプレッシャーは、やはり半端ではありません。ここからは、これまでの勉強・テスト漬けの生活を振り返ってみようかと思います。

医学類は、一般教養と呼ばれる全学部共通のカリキュラムを1年生(1年生で切り切れなかったら2年生になってもやります)で、2年以降は専門科目を学習します。解剖学などいわゆる“医学部らしい”勉強は専門科目になります。2年生では解剖学や生理学など主に人体の正常構造について、3年生では病理学や微生物学から、公衆衛生学などの社会医学も学びます。4年生では救急医学や眼科学など、診療科のごとの内容で学習します。5年生以降はBSL(Bed Side Learning: 病棟実習)をします、並行して医師国家試験に向けての勉強も進めます。

4年生は今試験期間の真っただ中で、僕自身も含め皆勉強に追われています。いったい誰なのでしょう、こんな試験ツメツメの無茶な日程を組んだ学年代表は…。これは冗談ですが、それくらい、どのようにしてもツメツメになってしまう程の大量の試験があるということです。2~3年で基礎医学をしっかりやっておけば、理屈を理解しながら勉強を進められるためかなり楽になります。なので

僕は今とても大変です。ですが、5年になって実際に患者さんの目に触れる場所に出る以上は、医療者としての自覚と能力が求められます。甘えることなく淡々と勉強をしていかなければなりません。それに足る人物かどうか見極めるCBT (Computer Based Testing) が4年の10月に控えています。2年生からの全ての科目から出題されるため、そういう意味でも後輩の皆さんには少しでもいい

から勉強を頑張っておくことをお勧めしたいです。

こうして振り返ってみるとたった3年少しであることを感じさせないほどに、これまでの学生生活は忙しいものでした。ときには2〜3日徹夜してテストに臨んだりもしました。ですが“医者は一生涯勉強”の言葉にも表れている通り、目の前の患者さんを救うため少しでも知識を蓄えアンテナを広げ続けるためには、今少しで

も貯金を作っておかなければなりません。僕は優秀な同期よりそれに気付くのが少し遅かったですが、十全同窓会の名に恥じぬよう頑張っていきたいと思います。

写真も貼っていいとのことでしたので、今までに授業でもらったレジュメ (配布資料やPowerPointのハンドアウト) の束をお見せしようと思います。後輩の皆さまにおかれましては、大きな本棚を買うことを強くお勧めいたします。

キャンパスビジット2019 (オープンキャンパス)

日時／令和元年8月8日(木)

場所／宝町十全講堂

令和元年8月8日(木)、Open Campus 2019のイベントの一つとして、高校2年生以上を対象とした医学類キャンパスビジットを宝町十全講堂で開催しました。高校1年生を対象としたサマーカレッジは、翌日の8月9日(金)に角間で開催され、大学の概要説明、在校生との懇談などが実施されました。キャンパスビジットの当日は、連日の猛暑の中ではありましたが、北は北海道、南は福岡県まで全国各地から合計258名の参加者がありました。

昨年同様、午前・午後の二部制として実施し、和田隆志医学類長の歓迎のご挨拶からはじまり、続いて教育委員長の私が、医学類の教育や近年の入試状況、学校生活、国会試験合格率についての説明を行いました。午前の部では、研究の最前線として、尾崎紀之教授の「からだのしくみと痛みの不思議を探る」、午後の部は、医療の最前線として絹谷清剛教授の「核医学ってなに？放射線でがんが治せるんだぜ」との演題で講演があり大変

好評でした。

その後、教員・在学生との懇談会を実施し、教員は午前の部は尾崎教授、川尻教授、河崎教授、原助教、午後の部は絹谷教授、村山教授、藤永教授、安藤教授にご登壇いただき、学生は1〜5年生の6名に協力を得、私の司会で、金沢大学の魅力、授業や学生生活、医学類入試などについて、参加者からの質問に答えました。質疑応答は途切れることなく、金沢大学医学類の魅力や社会における果たすべき役割を知ってもらう良い機会に

なったと思います。参加者からの実施後アンケートでは、「医学に興味を持った」、「モチベーションが上がった」などといった多数の感想が寄せられました。

キャンパスビジットは、学生募集や広報活動の一環として、次世代の金沢大学医学系の担い手のところを動かす重要な入学前イベントと考えています。優秀で意欲の高い学生を全国から集め、キャンパスの活性化に繋げていきます。

(山本 靖彦：記)



金澤醫學校解剖遺骸之碑

解剖遺骸之碑

中教正島地黙雷篆額

石川縣金澤醫學校校長兼金澤病院長田中信吾撰 野崎近彝書

金澤醫學校教諸生肄解剖術例用罪囚刑死者屍自明治三年始至今所解剖凡二十餘人頃者教授諸生等相議以其有利於我醫學也謀建一碑記之以慰剖者之靈囑余撰文蓋古之建碑勒文者或表其功業高當時或記其德澤垂後世要其足以裨世益民者而後刻諸金石以傳不朽也未聞功德無足傳而徒爲建碑勒文者焉矧其爲刑餘之罪骸乎雖然刑者國法也罪而至刑其罪盡矣其罪既盡而復取以解剖者非其罪也不特非其罪而且資其遺骸以驗我醫術俾醫術致其巧而察病之方得其要則其罪在生前而其利在死後則建碑勒文之舉豈其徒乎抑醫學之行我國久矣而所謂學者率墨守神農仲景之舊套而不能通格物窮理之要至如解剖術則往往不仁視之斥以爲屠者之業醫術之不振可知己近來西學之風普及邦内凡百學術一變舊習於是乎格物窮理之法爲醫學要務而解剖之術始盛行于世今在我校所解剖者固不爲多而學者得由此廣其知精其技資以通格物窮理之要者爲不少焉異日醫術大進使閭閻之民免疾疫天蚤之艱以全其天年者未必不由于此也則其於裨世益民豈淺淺哉抑吾聞之昔者聖王有掩骼之政賢者垂瘞旅之文夫骼與旅不問其何如人惟我心惻隱即爲掩之瘞之并爲文以弔之況乎此解剖者明明有利於我醫學并有利於世之病者安得以其生前之罪而遂沒其死後之利也哉余承乏校長與諸子同意故爲叙其由而記之

明治十六年十月建石

《注釋》

〔肆〕 學習する。

（碑面には「肆」と刻しあるも、明らかに誤字也。因つて訂正す。）

〔頃者〕 先頃。

〔勒文〕 文を彫り込む。

〔德澤〕 恩恵。

〔裨世益民〕 世の人の役に立つ。

〔刑餘之罪骸〕 刑罰を受けた人の骸（むくろ）。

〔神農〕 伝説上の帝王、医薬の神とされる。

〔仲景〕 漢末の著名な医学家。張機の字（あざな）。

〔舊套〕 昔からそのまゝの形式、やり方。

〔格物窮理〕 事物に本来備わる理を窮め、

それに拠つて事物を正しく処理すること。

〔屠者〕 家畜を屠殺して肉や皮を採ることを職業とする人。

〔凡百〕 さまざまな。

〔閭閻〕 県全体を言う。

〔天蚤〕 「早夭」。若死にすること。

〔天年〕 天く受けた寿命。

〔掩骼〕 野晒しになっている屍骨を埋葬する。

《礼記・月令》：孟春之月、掩骸埋鬣。「鬣」は腐肉。

〔瘞旅文〕 明・王陽明の作。陽明が龍場に謫居した時、京吏某父子及び僕の

三人が途上に斃死せるを憐れんで、丁寧に埋葬して作った弔辞を指す。

〔惻隱心〕 他人の不幸を憐み、同情する心を言う。仁の本源也。

〔承乏〕 官吏が自分の任官を謙遜して言う。

本学医学類の前身である金澤醫學校の時代に建石された、金澤醫學校解剖遺骸之碑(明治16年)の訓読文を河崎一夫名誉教授より紹介いただきました。この訓読文は、先生の中学同期の宮前外彌旺氏(石川県漢詩連盟事務局長)からいただいたとのことです。

先達思想は、現代の医学に生きる我々と同一なものであると感じます。本学医学類の歴史を感じ取るとともに、志を新たにしていただければ幸いです。(絹谷 清剛：記)

《訓讀文》

金澤医學校の教諸生は解剖を肄(なら)うに、罪囚刑死者の屍(しかばね)を用いるを例とし、明治三年自(より)始めて今に至るまで、解剖せる所凡(およ)そ二十餘人なり。頃者(さきごろ)、教授諸生等相議し、其の我が医学に利あるを以て一碑を建て、之(これ)を記して以て剖者の靈を慰めんことを謀(はかり)、余に撰文を囑す。蓋(けだ)し古(いにしえ)の碑を建て文を勒(ろく)する者、或いは其の功業當時に高きを表わし、或いは其の徳澤(とくたく)後世に垂るを記し、其の以て裨世益民(ひせいえきみん)するに足るを要し而して後、諸(これ)を金石(きんせき)に刻し以て不朽に傳うるなり。未だ功德(とくどく)傳うるに足る無くして徒(いたづ)らに建碑勒文(けんびりくぶん)を為すを聞かざるなり。矧(いかん)や其の刑餘の罪骸(ざいがい)の爲にをや。然(しか)りと雖(いえど)も刑は国法なり。罪にして刑に至れば其の罪盡(き)きたり。其の罪既に盡きて復(また)取りて以て解剖するは其の罪に非(あら)ざるなり。特(たゞ)に其の罪に非ざるのみならずして而して且つ、其の遺骸に資(より)て以て我が医術を驗(ため)し、医術をして其の巧を致し而して病の方(ほう)を察し、其の要を得しむれば、則(すなわ)ち其の罪は生前に在りて其の利は死後に在り。則ち碑を建て文を勒するの擧は實に其れ徒(いたづ)らならんや。

抑、(そもそも)医学の我が国に行わる、や久し、而して其の所謂(いわゆる)学者は率(お)も、ね神農仲景の舊套(きゅうとう)を墨守(ぼくしゅ)して格物窮理(かくぶつきゅうり)の要に通ずる能(あた)わず、解剖術の如きに至りては則ち往々にして不仁視(ふじんし)の斥(そし)り以て屠者(としゃ)の業と為す。医術の不振なる知る可(べ)し。已(すで)にして近來、西学の風邦内に普及し、凡百(ひんひやく)の學術、舊習を一變す。是に於いて乎、格物窮理(かくぶつきゅうり)の法を医学の要務と為し、而して解剖の術始めて世に盛んに行わる。今や我が校に在りて解剖する所のもの固(もと)より多きと為さず、而して学ぶ者は此れに由り其の知を広め、其の技を精(く)くし、資(より)て以て格物窮理(かくぶつきゅうり)の要に通ずる者少なからずと為す。異日、医術大いに進み、閩(えん)民(ごうけん)の民をして疾疫(しつえき)天蚤(てんそう)の艱(かん)を免(まぬ)がれしめ、以て其の天年を全うする者、未だ必ずしも此に由らざるなり。則ち、其の裨世益民(ひせいえきみん)に於ける豈(あ)に淺淺ならん哉。

抑、(そもそも)吾れ之を聞けり。昔、聖王に掩骼(えんかく)の政あり、賢者に瘞旅(えいりょ)の文垂る、を。夫(それ)、骼と旅は其の人の何如(いかん)を問わず、惟(ただ)、我が心惻隱(そくいん)すれば即ち、為に之を掩い、之を瘞(お)さめ并(あ)せて文を為(つ)くりて以て之を弔す。況(いかん)や此の解剖者は明明として我が医学に利あり。并せて世の病者に利あり。安(いづ)んぞ其の生前の罪を以て其の死後の利を没せんや。余、承乏(しょうぼう)、校長と諸子と意を同じくす。故に為に其の由を叙して之を記す。

明治十六年十月、石を建つ。

第13回金沢大学ホームカミングデイ開催

今回で13回目となる、「金沢大学ホームカミングデイ」を10月26日(土)に開催いたします。今年も、午前中にキャンパス見学会を計画しました。

金沢大学ホームカミングデイ当日は、角間キャンパスにて「第56回金大祭」(10月26日(土)～10月27日(日))の開催期間中であり、さらに「ふれてサイエンス&てくてくテクノロジー」、宝町地区では「医学展2019」が開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。

す。また、金沢城公園では写真展「あこのころの金沢大学」を開催いたします。

歓迎式典、特別講演及び懇親交流会(参加費無料)は、角間キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながら、お気軽にご参加いただけるよう、企画しております。

ご家族や同期生、サークル仲間のみならずとご一緒に、紅葉の金沢へどうぞお越しください。学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

◎参加費：無料

◎申込み締切：9月27日(金)

◎申込み・プログラム等の詳細は下記へお尋ねください。

【金沢大学学友支援室】

TEL 076-264-5081

FAX 076-234-4033

メール

gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp



昨年の第12回ホームカミングデイの様子(学長挨拶)

nihon
medi+physics

明日の幸せを願い、
「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、疼痛緩和に有効な治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

for the happiness

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)
<http://www.nmp.co.jp/>

日本メジフィジックス株式会社

2018年8月作成



放射性医薬品・放射標識抗CD20モノクローナル抗体

放射性医薬品／生物由来製品／創薬／処方箋医薬品[※] 注）注意—医師等の処方箋により使用すること 薬価基準収載

ゼヴァリン[®] インジウム (¹¹¹In) 静注用セット

ZEVALIN[®] indium injection インジウム(¹¹¹In)イブリツモマブ チウキセタン(遺伝子組換え)注射液調製用

抗悪性腫瘍剤・放射標識抗CD20モノクローナル抗体

放射性医薬品／生物由来製品／創薬／処方箋医薬品[※] 注）注意—医師等の処方箋により使用すること 薬価基準収載

ゼヴァリン[®] イットリウム (⁹⁰Y) 静注用セット

ZEVALIN[®] yttrium injection イットリウム(⁹⁰Y)イブリツモマブ チウキセタン(遺伝子組換え)注射液調製用

●効能・効果、用法・用量、警告、禁忌及び併用注意を含む使用上の注意等につきましては、製品添付文書をご参照ください。
警告、禁忌及び併用注意を含む使用上の注意の改訂に十分ご留意ください。

製造販売元・資料請求先



ムンディファーマ株式会社

〒108-6019 東京都港区港南 2-15-1
問い合わせ窓口 0120-525-272

発売元

FUJIFILM

富士フイルム 富山化学株式会社

本 社 〒104-0031 東京都中央区京橋2-14-1 兼松ビル TEL 03(5250)2620
ホームページ : <http://ffc.fujifilm.co.jp>

® : ZEVALIN、ゼヴァリンは登録商標です。
2018年10月作成

The 30th Anniversary

これからもよろしくお願いします

『臨床医療に携わる皆さまのお手伝いをしたい』

『患者さまや病院のお役に立ちたい』

『地域医療を支えたい』

そのような想いをこめ、1989年の創業以来およそ30年システムを作り続け、PSPのシステムを導入させていただいたご施設さまが累計1000サイトを超えました。

今日の私どもがありますのは、ひとえに、皆さまのご指導の賜物と存じ関わってくださった全ての皆さまに厚く御礼申し上げます。

医療システムは **PSP** 株式会社

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5-13-1 TEL 03-4346-3180 www.psp.co.jp

ひとりひとりの 笑顔に応えたい。

皆さまのすこやかな明日のために、全力を尽くすこと。

優れた医薬品づくりを通じて、社会に貢献すること。

それぞれの思いや悩みを受け止め、一緒に解決を考えていくこと。

私たちは、健康への願いや夢に向かって歩む皆さまにとって、心から信頼のおけるパートナーでありたいと願っています。

私たちは、一丸となって、あなたの笑顔に答えていきます。

♡ + α = Smile!

〔資料請求先〕



富士製薬工業株式会社

〒102-0075 東京都千代田区三番町5番地7

<http://www.fujipharma.jp>

科学するヤクルト

ヤクルト中央研究所
(東京都国立市)

ヤクルトには「科学するひと」がいます。多くの研究者が、日夜、世界の人々の健康を願い、研究開発に力を注いでいます。
乳酸菌にできることはもっともつとあるはず。私たちはそう信じて、今日もここヤクルト中央研究所で、
すこやかな未来のために一人ひとりがミクロの世界を科学し続けています。



人も地球も健康に
Yakult

株式会社ヤクルト本社 <https://www.yakult.co.jp>

🍀 ホテル日航金沢

幸せ時間は、
いつもここに。
25th

SPECIAL THANKS!

おかげさまで ホテル日航金沢は 開業25周年を迎えました

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)
Tel : 076-234-1111 Fax : 076-234-8802

ホテル日航金沢

検索

www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員(14名)

太田 哲生
蒲田 敏文
中村 裕之
横山 茂(副編集委員長)
絹谷 清剛(編集委員長)
篁 俊成
和田 隆志
佐々木素子
谷口 巧
山本 靖彦
中田 光俊
倉知 慎
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(20名)

山口 成良
津川 龍三
赤祖父一知
佐藤 保
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
中本 安成
常山 幸一
古川 健治
若山 友彦
中西 清香

以上34名で構成されています。

土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真

金澤醫學校解剖遺骸之碑

金沢市街を一望する卯辰山に金沢大学屍体解剖の塚や碑があります。写真は、本学医学類の前身である金澤醫學校の時代に建石された「金澤醫學校解剖遺骸之碑」。本誌46頁にて碑文を紹介しています。右は、良家の方(加能郷土辞彙より)で最初の献体をされた三輪照路氏の墓。

題字：中村 信一(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640 金沢市宝町13-1
<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和元年9月26日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

今年度より同窓会会費を1月号に併せて徴収させていただくこととなりました。十全医学会とは別組織であることをご理解ください。名簿改訂は5年毎に変更となりました。次回改訂版(2020年)は、従来と同様に会費納入者へお届けいたします。

編集後記

令和初めての夏も、厳しい暑さとなりました。この夏の金沢の救急搬送件数は、金沢市消防局の発表によると、過去5年間で見ると記録的な猛暑であった昨年に次いで多かったということです。本号が発刊される頃には暑さは落ち着いていると思いますが、十全同窓会会員の皆さまはお健やかにお過ごしでしょうか。

今年の夏の甲子園大会は、金沢の星稜高校が1995年以来24年振りに決勝進出し、深紅の優勝旗が、初めて石川県にやって来ると期待しましたが、残念な結果に終わりました。思い起こせば5年前、星稜高校が高校サッカー選手権で初優勝しましたが、その2年前にはベスト4、前年には準優勝しており、優勝するためにはそのような段階を踏まなければならないのかもしれませんが。準優勝は立派な結

果ですが、この躍進の一つの要因は、石川県内で競い合い、別の大会で全国優勝を果たした二つの中学校出身の主力選手が星稜高校に進学し、その力が合わさったことによるのではないかと推察しています。

金沢大学附属病院では、本年、内科の再編成が行われました。私のように旧内科の出身で大学を離れた者にとっては、戸惑いがあるというのが正直なところですが、同じ分野で切磋琢磨してきた旧内科の力が結集されたわけですから、金沢大学医学部、そして附属病院が、必ずや素晴らしいものに発展し、今以上の力を発揮するができるかと確信しています。同窓会会員の皆さま方と一緒に、見守っていきたくと存じます。

(古川 健治：記)